

磐田市立郷土館報告 第Ⅱ輯

# 遠江見性寺貝塚の研究

1 9 7 4

磐田市教育委員会

磐田市立郷土館報告 第Ⅱ輯

## 遠江見性寺貝塚の研究

1974

磐田市教育委員会

## はじめに

このたび、「遠江見性寺貝塚の研究」が、刊行されるはこびとなりました。

本調査報告書は、遠江考古学研究会の若い研究者たちによる、前後2回にわたる発掘調査の学術研究の成果を集約されたもので、本調査に傾倒された真剣な学究的態度に深く敬意を表する次第です。

また、本報告書の刊行は磐田市の古代文化発明だけでなく、広く日本古代文化研究に大きな手がかりを与えることとなり、まことによろこばしい限りです。

当磐田市は、豊かな自然環境と数多くの文化財に恵まれた歴史環境を大切にし、現代社会生活に活用を図ることを市政の大きな柱として、新しい郷土、磐田市の建設に努めております。

わたくしたちは、ふるさとの文化財を誇りとし、永く保護するとともに、顕彰に努めたいと考えております。

ここに、末筆ではありますが、改めて発掘調査に参加された研究者各位、本報告書を執筆いただきました先生方、ならびに調査から報告書出版まで御支援いただきました、文化財関係各位の御尽力に深甚なる感謝の意を表します。

昭和49年12月

磐田市教育委員会

教育長 鈴木真三

# 遠江見性寺貝塚の研究

## 目 次

第一 章	調査の目的	1
第二 章	貝塚の位置及び環境	2
第三 章	貝塚の調査	5
	発掘区の設定	5
	調査の経過	5
第四 章	遺物の出土状態及び調査区の断面観察	11
第五 章	出土遺物	15
	縄文時代の遺物	15
	弥生時代の遺物	32
	古墳時代の遺物	34
	奈良、平安時代及びそれ以後の遺物	37
第六 章	見性寺貝塚出土上の動物遺存体	39
第七 章	見性寺貝塚人骨群所見概説	42
第八 章	見性寺貝塚調査における二・三の問題	45
	1. 今の浦周辺の遺跡群について	45
	2. 水神平式土器（の編年的位置）について	49
	おわりに	54

## 挿図目次

1図 見性寺貝塚位置図	2
2図 見性寺貝塚周辺地形図	4
3図 発掘区配列図	7
4図 A7区土器出土状態図	12
5図 発掘区断面図	(折込み) 14~15
6図 土器拓影 1	17
7図 土器拓影 2	19
8図 土器拓影 3	20
9図 土器拓影 4	21
10図 土器拓影 5	23
11図 土器実測図	25
12図 土製耳飾実測図	28
13図 石器実測図	31
14図 土器拓影 6	32
15図 土器実測図	33
16図 土器実測図	35
17図 土器実測図	37
18図 陶馬実測図	38
19図 見性寺貝塚周辺遺跡分布図	46
20図 各貝塚の中心時期比較図	47

## 図版目次

図版I 見性寺貝塚位置及び近影
図版II 発掘の状態及び発掘区断面
図版III 土器出土状態
図版IV 出土土器 1
図版V 出土土器 2
図版VI 出土土器 3
図版VII 出土土器 4
図版VIII 出土土器 5
図版IX 出土土器 6
図版X 出土石器
図版XI 出土下顎骨
図版XII 出土大腿骨

## 例　　言

- 1 本書は1968、69年の二度に渡って実施した磐田市見性寺貝塚の発掘調査報告である。
- 2 調査は主として遠江考古学研究会の会員によって行なわれ、植松章八・尾藤疏・平野吾郎の三名が中心となって実施した。
- 3 調査には島田商業高校、浜松女子商業高校、磐田南高校、磐田北高校、浜松市立高校の生徒諸君の応援があった。
- 4 上記高校の生徒諸君の発掘調査日誌の一部を第三章調査の経過に収録した。
- 5 出土資料の整理は植松章八・平野吾郎が主としてあたり、島田商業高校生徒諸君の応援を得た。
- 6 発掘調査によって出土した資料は全て磐田市教育委員会に保管されている。
- 7 本書第六章は早稲田大学金子浩昌・鈴木洋子両氏の執筆によるものである。
- 8 第七章は新潟大学小片保・関井康雄両氏の執筆によるものである。
- 9 第六・七章以外は全て平野吾郎が執筆した。
- 10 図版写真は浜松市立博物館向坂鋼二・漆畠敏・長己均の諸氏の撮影によるものである。
- 11 実測図、拓本は全て平野吾郎が作成した。
- 12 本書の編集は平野吾郎が行なった。

## 第一章 調査の目的

遠江地方の縄文時代後・晩期は貝塚の形成によって特徴づけられる。西より浜松市蜆塚、磐田市石原貝塚・西貝塚・東貝塚・見性寺貝塚・袋井市大畑貝塚の諸貝塚があり、それらは広くは三河湾沿岸を中心とした浅海あるいは内湾砂泥性の貝塚群の東端に位置している。

石原貝塚、西貝塚、東貝塚、見性寺貝塚等は今の浦周辺を中心に磐田原台地の南端に形成されている。磐田市内にあるこれらの貝塚が注目され始めたのは決して新しい事ではなく、坪井正五郎博士あるいは清野謙次博士（清野1925.1969）等による西貝塚の調査を初めとしていくつかの調査がおこなわれている。しかしいずれも小規模な調査であり、又人類学的興味を主眼にした調査であって遺跡の実態は不詳であった。この地域に初めて本格的な調査がおこなわれたのは1951年の大畑貝塚の調査であり、つづいて1958年の西貝塚、その翌年の石原貝塚の調査であった。なかでも西貝塚、石原貝塚の調査は1955年から始まった浜松市蜆塚遺跡の調査に平行するものであり、その成果の発表と合せて当時は遠江地方における縄文時代研究の最も高揚した時代と言ふ事ができよう。

諸貝塚の調査と地域における研究の高揚に刺激されて昭和16年に発見されて以来（池田1954）注目される事のなかった見性寺貝塚もようやく注目され始め、何回かの踏査と表面探集がおこなわれた。特に境内の西端の竹林と梅林との境界に掘られた溝附近に貝殻が見られ、土器が探集された。ここで探集された資料からこの貝塚が縄文晩期前半を中心とするらしい事は考えられたがそれ以上の詳しい事はそれらの資料だけでは不明であった。

東海地方の縄文晩期の土器群の実態は現在必ずしも明確でなく、種々の論議がおこなわれ混乱が見える。そうした晩期の土器群の解明を一つの目的に見性寺貝塚の調査を実施した。特にこの貝塚で從来蜆塚においては貝層形成期以後にあたる時期の資料を探集している事に多くの期待を持った。又今の浦を取りまく径3キロメートル程の円の中に位置する三つの貝塚の関係を軸とする地域的な検討のためにもこの貝塚の内容が明らかにされる事が必要であった。

こうした目的のもとに1968.69の2回に渡って調査を実施した。その結果については後に述べるとおりであるが、貝塚のある地域が後世整地され、貝層もほぼ全てが攪乱され、移動、再堆積したものであった。従って調査は、充分な成果を挙げる事はできなかったが、水神平式期の貝層の存在を確認した事を初め貝塚の年代、形成等についても從来の予想を上まわるかなりのものを得る事ができた。

## 第二章 貝塚の位置及び環境

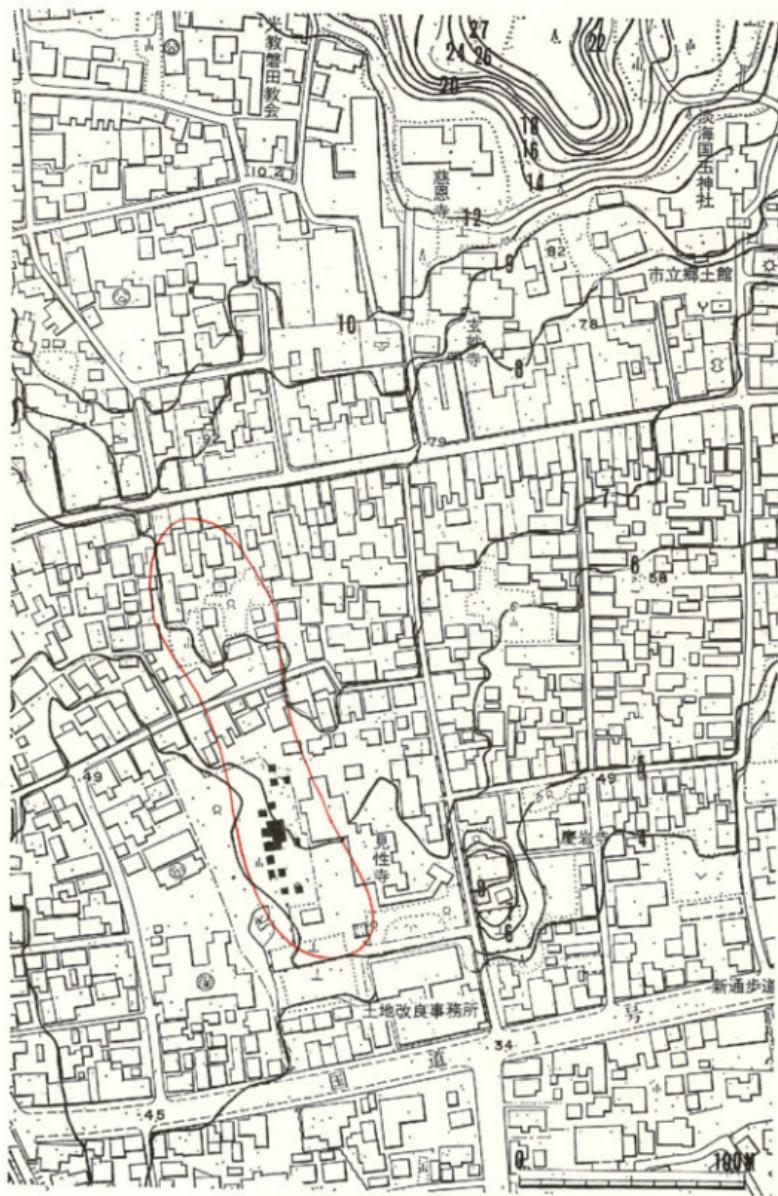
見性寺貝塚は行政区画上は静岡県磐田市見付2896番地、瑞雲山見性寺境内に所在する。洪積台地である磐田原が北から南に行くに従い高さを減じさらには南端は小河川の開拓作用によって刻まれた谷によっていくつかの丘陵に分かれながら沖積平野の水田の中に没している。そうした丘陵



第1図 見性寺貝塚位置図 1:50000「磐田」

の先端が水田に接する所に西貝塚・東貝塚・石原貝塚及びこの見性寺貝塚が存在する。加茂川と中川とに分かれた今の浦川の先端によって東西を浸食されて細い丘陵となった台地の末端部が今 の浦の沖積地に面する所、海拔5メートルの等高線の通る所に見性寺貝塚は位置している。見性寺を取りまく地域一帯は第2図に示したように丘陵化した台地の南端冲積面との境にあたる所を国道1号線が通り、さらに北側250メートル程の所を旧東海道が通っている、街道の両側は見付の宿として栄えた所であり、現在も一部に宿場町の面影を残している。従って見性寺を取りまく周囲は全く市街化してしまった見性寺の現本堂の西側、日本堂址にわずかに南北60メートル、東西30メートル程の空地があるにすぎない。市街地に埋もれた貝塚と言つてよい状態であるが、幸いこの空地に貝層が見られたのでここを調査地点に選んだ。見性寺附近の微地形を観察すれば北から南に延びる台地は磐田市立郷土館及び淡海国玉神社の所で切断され、それから南になだらかに傾斜しているがその先端見性寺の東に海拔8メートルの削り残して高くなつた所があるのでこの辺一帯でかなり削平されている事を知り得る。それらは5メートルの等高線によってさらに明らかにされる。静岡県土地改良事務所の北側に80メートル程直線になり、さらに北側100メートル程延びている。これは南及び西の低い部分を埋めたて整地した事を示すものであろう。これは発掘調査によつても確認された。この整地がいつおこなわれたものかは明らかではないがかつての見性寺の境内を示すものであろう。又西側に小さな池があるがこれは今でも水が湧いており、洪積層と冲積層の境に位置し、不透水層の上を流れる水を溜めているものと考えられよう。

見性寺の前に広がる今の浦一帯は海拔が低く特に中央部は2メートル以下であり、下流の伊豆川の河口附近と大差ない程である。従つて現在でもかなり深い湿地帯であり、市の中心部に近接しながらも市街化が遅れ、自然の景観を比較的良く保つてゐる。今の浦周辺に先史時代人の跡が見い出されるのは縄文中期初頭である。後期になると西貝塚、石原貝塚そして見性寺貝塚にも貝層の形成が始まり、この地域の集落の最も盛んな時期を作りあげる。縄文前期にピークにあったと考えられる海面がその後の海退現象により徐々に後退し、遠浅の砂泥性の潟湖が形成されると共に狩猟、採集生活に適する自然条件が整つて來た事を示している。各貝塚の出土資料によれば海面の相対的低下はさらに続き、この地域の潟湖がしだいに淡水化していった事を知る事ができる。弥生時代の中期に入ると磐田原南方の沖積平野の開発が始まつてくる。さらに後期になると開拓は進み太田川流域、天竜川流域にも遺跡が見い出されてくる。磐田原台地上に位置する加茂東原遺跡（鈴木、平野1969）はその一つである。さらに古墳時代になると集落は増加しその規模も拡大するようである。低く丘陵化した洪積台地が水田中に没した所の延長を発掘すれば、ほとんどの所に古墳時代以後の集落が発見されると言つてよい。同時に大規模な古墳が磐田原の東南部に形成されて行く。見性寺貝塚は海退現象の始まった縄文後期から形成はじめ、縄文晩期終末まで継続し、さらに弥生後期つづいて古墳時代中期にまで及んでいる。



第2図 見性寺貝塚周辺地形図

○遺跡の範囲

### 第三章 貝塚の調査

#### 発掘区の設定

貝殻の散布が見られるのは本堂の西側の梅林と竹林にかけてである。さらに北側水道管理設工事中に貝層が発見されているとの事であるので貝層が延びている事が予想されるが、表面からははっきりしないし又すでに宅地化してしまい調査のできる状態ではなかった。従って見性寺本堂及び太子堂と磐田保健所に挟まれた部分の梅林、空地を中心調査区を設定した。調査は何回か継続的に実施する計画であったので、調査区が連続し得るように調査可能な地域全体に3メートルの発掘区を方眼に設定し、それを描る事にした。西南隅の竹藪寄りの所に原点を設け、それよりも北へ1~20と順に番号付け、南には01、02と頭に0を付ける事にした。又東へはアルファベット順にA~Xとしアルファベット記号による東西軸と数字による南北軸を連ねて呼ぶ事にした。従って各調査区はC 6区・あるいはD 02区の名で呼ばれる事になる。

第1次調査では台地の西端と考えられた地点に調査の中心を置きA 1、A 3、A 5、A 7、A 10、及びC 7、D 02、D 1、D 6の各区の調査を行った。統いて第2次調査では先の調査で貝塚のかなり明瞭であったC 7、D 6区を中心にしB 5、B 7、B 8、C 5、C 6、C 8、D 7、D 8の調査を行い、さらに遺跡の様子を知るためにC 11、D 17、G 02、G 15、H 5等を設定し調査を実施した。以下調査の経過を発掘日誌に従って略述しよう。

#### 調査の経過

第1次調査は1968年8月17日より23日までの6日間実施された。

8月17日（晴）

午前中磐田市立郷土館に集合し、発掘機材の点検及び発掘に必要な資材を発掘現場に運搬した。午後より発掘区の設定及び枕打ち作業をおこなう。A 1、A 3、A 5、A 10の各区を設定し早速発掘作業に取りかかる。表土層は小礫が多く硬い。出土遺物は縄文式土器から須恵器、土師器及び近世の陶器までを含んでいるが、その出土量は多くない。表土層の下は混疊黒褐色土層であり、土器片と共に獸骨が出土し、特にA 5区においてはこの層の下部より人骨がかなり纏まとった状態で発見されている。しかし頭蓋骨、四肢骨等散乱した状態であり、埋葬時の様子を残しているわけではなかった。

『初めての発掘だったのでいざ人骨が出てくると胸がドキドキしてどうして良いかわからなくなってしまった。石器が3点出て来ました。一寸見るとなんでもない石に見えましたが、良く見ると先端が尖っているのに気がついた。とにかく第一日目で何から始めて良いかわからな

かったが、明日からは今日の経験を生かしてがんばろう』 A 5 区、沢本敏雄。

8月18日 晴

各区とも調査を続ける。新たに D 1 区を設定、A 1 区は表土より 150 センチ程掘り下げたが、貝層は発見されず、表土下の黒色土が続き、粘土を含んだ黒褐色土層の下部では水が湧き出し調査は思うようにならなくなる。A 3 区は混土貝層が一部現われて来るが、擾乱がはげしい。A 5 区は昨日発見された人骨の取りあげに手間取っており、なかなか進まないが、同じ層から条痕文系の土器が出土している。他に須恵器、土師器等が出土しており、この層全体が擾乱を受けている可能性が多い。A 10 区では表土層が深く、基盤の褐色土層まで擾乱されている。D 1 区は表土下に堅く締った面があり、寺院の基壇の一部かと思われるが、はっきりしない。又その下から混土貝層が出ていている。

8月19日 晴

A 1 区、A 10 区は本日で発掘を完了するが遺物も少く、貝層も発見されていない。D 02 区、D 6 区を設定する。A 3・5・7、D 1 の各区は貝層の調査に入る。いぜんとして色々な時代の遺物が少量ながら混っている。

『東側に寺院の基壇の一部かと考えられる石敷が出ているので西半分を深さ 65 センチまで掘り下げた所から貝層が見られた。貝層は南隅が厚く、西北に獸骨が出土している。貝層の中から釘が 2 本出て来た。「擾乱されている所だろう」との事だが一寸がっかりしてしまった』 D 1 区  
佐野節子

8月20日 晴

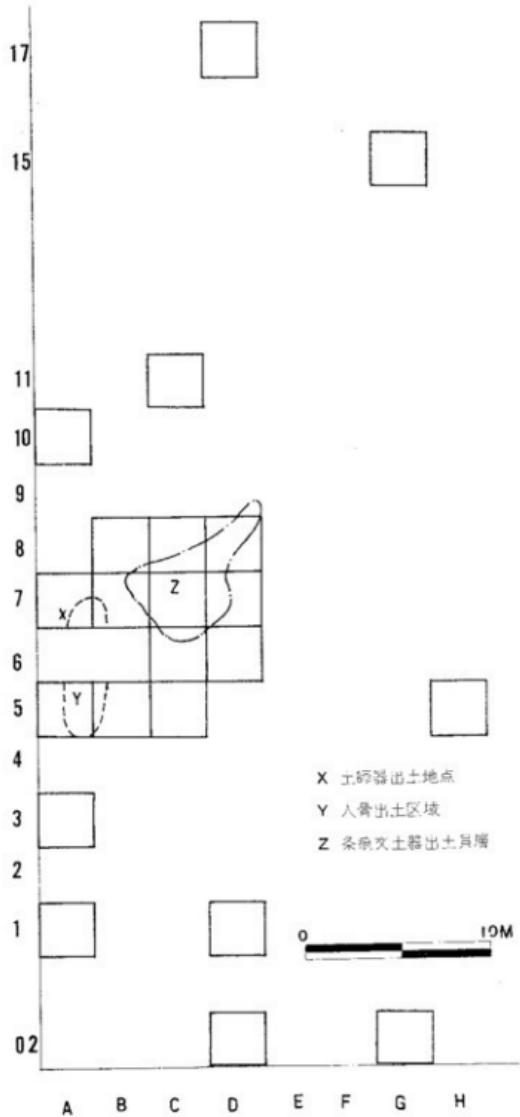
A 3 区、A 5 区の調査完了、A 7 区の貝層を調査し下層に青黒色の粘土層が出て来る。最下層の黄褐色土層の上面より土師器が一括して出土する。それにより A 区に表わされていた貝層は全く整地作業によっての再堆積されたものである事が判明する。各時代の遺物がそれによって混在する事情も理解出来る。又 D 1 区、D 02 区に表わされている貝層も同様再堆積である事が確認される。特に D 02 区では貝層中より平安時代の須恵器が 4 点ほど出土する(図版Ⅲ)新たに C 7 区を設定し D 6 区と共に表土を除去する。

『貝層を 50 センチ程掘り下げた。全体で 1.5 メートル程掘り下げたところ水が湧き上がりグシャグシャになった。貝層の厚さは 50 ~ 60 センチ位であった。骨の破片や土器の破片が出たが、先生の話では土器に新しいものが混っており全体にかなりの年代差があるとの事だった。貝層下からはあまり土器が出土しなかった。最後に埋めたが、埋めもどすのは大変な仕事だと思った。』

A 5 区 増井いく代

8月21日 晴

昨日までの合宿の島商生が帰り、遺跡全体に人員が少くなる。応援の磐田南高、浜松市立高の生徒諸君を含め総員 15 名である。D 6 区、C 7 区の調査を中心とする。共に貝層の発掘を行うが特に C 7 区より条痕文土器の出土が多く、他の時期の土器が出ていない事より貝層が他の区と



第3図 発掘区配列図

は異り、原状を保っている事が推測出来みんなはりきった。

8月22日 晴

見性寺が豊涼を兼ねた宝物展を開くため調査を中止した。

8月23日 晴

調査の人数も少くなり、総員で4名とだいぶ寂しくなる。C7区の発掘を完し、断面図の作成にかかる。貝層下に黒褐色土層、さらに灰褐色の粘土層と続くが、南壁の東寄り（D6区寄り）に洪積層と思われる黄褐色土層が現われる事によりこの貝層も後世擾乱あるいは整地作業により再堆積されたものである可能性がある。各区の埋めもどし作業を終え、今回の発掘を終了する。

今回の調査の結果、貝塚全体が後世の整地作業によって擾乱されており、特に台地の周辺部に表われている貝層は全て再堆積である事が判明した。この整地作業の時期がいつごろであるかは今の所不明であるが整地層より奈良、平安期の瓦及び土器類さらには近世にまで及ぶ種々の遺物が発見されており、整地作業が何回かに及んでいる事と最後は江戸時代に行なわれている事等が考えられる。この整地作業の大半は見性寺建立あるいは再建によるものであろうが、

奈良、平安期の遺物を含む事については寺院の開山の時期と合せてなお、検討の必要があろう。台地の周辺部から奥に入ったC 7区、D 6区等における貝層は周辺部のものとはかなり様子も異り、貝も破碎されておらず、元の位置を保っている可能性がある事が解った。特にこの貝層よりは条痕文土器が中心的に出土しているので、貝塚の形成期を考える上に興味のある所である。

## 第2次調査

第1次調査に統いて1969年8月17日より28日までの11日間に渡って行なった。今回は特に台地の内側に入った地域の調査と遺跡地形図の作成を中心とした。

8月17日 晴

午前中器材の点検、準備をおこない午後から昨年度の調査区の確認とD 1区に基準の杭打を行い各調査区の設定を行う。

8月18日 晴

発掘器材の準備等を中心にして、発掘作業には取りかからない。

8月19日 晴

現状写真撮影の後、C 5区、C 6区の発掘に取りかかる。表土層を除去した所で本日の作業終了。

8月20日 晴

C 5区、C 6区の発掘を行う。表土下の黒褐色土層は礫を混え強く突き壓めてあり、さらに一部に板状に突き壓めてある所もある。昨年度の調査によって寺院基壇の一部と推定されているものである。C 5区においては黄褐色土が南半分に現われている。遺物は縄文式土器、須恵器、土師器及び近世の土器が混在している。又B 5、B 7、C 8、D 7、D 8の各調査区を設定する。

8月21日 晴

本日より島商高、浜松女子高、磐田南高の生徒が参加する。遺跡に人数が多くなり、本格的な調査が始まった感が強くなる。B 5区、C 8区、D 7区、D 8区の調査を始める、C 5区では貝層は検出されず、C 6区で北側に貝層が現われる。本日より地形測量を開始する、寺院の境内全域を含めて100mの縮尺で実測することにし測量用トライバースの設定にかかる。

『初めての貝塚発掘、合宿前から自分の手で発掘する事にいくらかの軽い興奮を覚えていたが、いざ当地に着くとちょっと期待がはずれた。50センチ～60センチぐらい掘っていたのに貝はまだ現れていない。我々は今日は土上げを手伝った。土の中に骨、土器のかけらがてて来た時はそれがとても小さいものでも何か感慨が深く意味あるものと思うとついねいにあつかった。70センチのところと90センチぐらい掘ったところでようやく貝が見え始めた。そんな所で今日は終った。』 C 6区 石川多津子

8月22日 晴

昨日の調査区に続き、本日B 7、B 8区を設定し調査にかかる。各区に現われていた貝層の広がりを追う一方、貝層が最もしっかりしているC 8区の調査を進める。条痕文土器が出土する貝

層中から須恵器、あるいは弥生式土器が出土し、貝層はやはり擾乱され、移動されてるとの感を強くする。

『昨日に負けぬ程の暑さで体の疲れもひどくなり、大変眠い。今日は一日中C 8区の貝層掘りだったけれど、やはり昨日の土を掘り起すだけの作業とは問題にならない程の興味が湧いた。というのは珍しい遺物がたくさん出土したからだ。今日の発掘のクライマックスは黒縞石が出土したことではないだろうか。大変美しい紫のすきとおったような黒縞石が私にはとても珍しく、なおさら美しいものに見えた。この綺麗な石片がいつごろ、どんな所から持って来たものなのか、又何に使われたのか、その他いろいろな事が解ったら素晴らしいだろうと思う。とにかくあの紫の石の美しさは当分私の頭から消えないだろう。』 C 8区 松山伯子

8月23日 雨のち晴

午前中台風の接近が予報され、雨が強くなる。今日までの予定の高校生の合宿を切り上げて、朝のうちに帰宅させる事にする。午後雨が止ったので発掘区の排水作業をする。

8月24日 晴

見性寺恒例の図涼を兼ねた宝物展のため、終日発掘作業を止める。「昨年出土した土師器の完成品を展示してほしい」との事であり、何点かを展示する。

8月25日 晴

地形測量を行う。発掘区を中心とする地域は完了するが、他は市街地となっているために測量は難行している。先日より続いているB 7、B 8、C 5、C 6区の発掘を完了し、本日より新たにG 02、H 5、C 11、D 17区を設定する。B 5、C 8、D 7、D 8の調査完了を急ぐ一方、C 8区を中心に出ていた貝層は全て整地に伴う再堆積層である事が判る。又D 8の南側に大型の礫を積み、ほぼ東西方向に延びた遺構が現われたが寺院の建物に伴うものであろうがはっきりしない。

『測量は思ったより難しかった。しかし学校でいくらか測量の練習をやったので途方に暮れないとんだ。1mの縮尺で作ったが精密さには驚いてしまった。1ミリ（実長10センチ）の差をこの時ほど尊く思った事はなかった。』 测量班 西田登志彦

8月26日 雨のちくもり

午前中雨であったので大学生が中心になり、高校生と勉強会をする。午後から発掘作業を始める。G 15を新たに設定。昨日から始めたG 02は全体に擾乱されている。これは見性寺貝塚の発見の端緒となった昭和16年の弘法堂の改築に伴う土取りによるものであろう。H 5区は黒色土、黄褐色土と交互に整地された痕がはっきりし、遺物の出土はほとんどなかった。C 11、D 17区は表土が浅く、表土直下に黄褐色土が現われており、遺物の包含はほとんどない。C 11区に楕円形の小堅穴があり、人骨が出土した。保存状態が悪くボロボロであった。新しい時代のものらしい。

『表土だったので、シャベルで活発に作業をやった。発掘区の中に木の根がたくさんあって掘

りにくかったが、掘って行くにしたがって掘り良くなった。でも石がごろごろしていた。表土のすぐ下に人骨が出て来たのには驚いてしまった。又人骨をスコップで削ってしまった事を反省している。表土掘りを行う時にも、もっと細かい所まで神経を配っていこう。』 C11区 小沢 明

8月27日 晴

G02、H5、H15、G17各区の調査を継続する。それに平行して各区の断面図の作成を行う。調査の済んだB7、B8、C5区の埋もどし作業を行う。又地形測量作業を昨日に継続して行う。

『この見性寺貝塚の発掘で初めて測量をやったが大変つかれた。今まで測量をやっているのを見ると楽しそうだなあと思ったけれど、実際やってみると藪蚊に刺されて大変だった。肉体的にというより精神的につかれた。特にメジャーを読む時などまちがえないように緊張の連続だった。今度は助手の役をしたが、次にやる時は平板に書いてみたいと思う。』測量班 友田由喜夫

8月28日

H5区、C11区、G15区完了3、各調査区を埋めもどし、夕方17日からの全作業を終了した。

2回に及ぶ調査で22区画の調査を行った。後に述べるが全調査区共に後世の寺院建築等により整地され、ほぼ完全に攪乱されていると言つて良かった。又今回のような方式による発掘では寺院址等の規模、時代を明らかにするのは不可能であり、調査区をこれ以上拡大する事は将来明らかにされるかもしれない建築遺構を破壊する恐れもあり、同時に我々の調査の目的が、今以上良好な状態で達成される事もなさうなので、今回で見性寺貝塚の調査を打切る事にした。



発掘作業（その1）

## 第四章 遺物の出土状態及び調査区の断面観察

調査経過の所でも述べたが、調査区域内の貝層はほぼ全て整地作業により移動及び攪乱を受けている。従って遺物は各時期のものが混在して出土しており、さらに細片となっているものが多い。特に攪乱のはげしい所では縄文時代より、近世のものまでが混在した状態を示している。従って遺物の出土状態はさほど意味を持たなくなってしまったが、貝層あるいは黒褐色土中の出土状態のうちにかなり一括した移動を示す状態が見られたので、それらを中心に述べてみよう。

### 人骨の出土状態

A 5 区を中心にならりの量の人骨が出土した。いずれも散乱しており、攪乱を受けているのは明瞭であった。又断面の観察により、混疊黒褐色土層と呼んだこの層が全て移動されたものである事が明らかになり、従ってここに出土している人骨が原埋葬状態とはほど遠い事も明らかになった。しかし各調査区を観察してもまれに1片あるいは2片出土するのみで、ほとんど人骨は出土せず、人骨の出土の著しいのは A 5 区及び A 7 区の一部であり、共に混疊黒褐色土層中の貝層に近い部分であった。従ってここに出土している人骨が整地作業中に元の位置よりかなり纏まった状態で運ばれた事を考えて良いであろう。又これらの人骨は整地作業中に各地で発見されたものが再埋葬されたという形跡は全く残していない。

解剖学的所見は第7章に小片保・関井康雄氏によって詳しく述べられている。これらの事により、出土した人骨は恐らく遺跡の中の特定の場所に墓地として集中的に埋葬されていたものが整地作業により墓地が一度に破壊され運ばれて来たものであろう。破壊され、運ばれて来た時期は断面観察の項でも述べるが、現在建っている本堂の前の伽藍（江戸時代前半に建立し、江戸末に焼失したとの事である）の建立に伴う整地作業によるものであろう。さらにこれらの人骨の年代についてであるが、先に述べたような事情により比定は困難であるが、周囲から出土している遺物及び調査区の断面の検討よりすれば、恐らく縄文晩期を中心とする時期を考え事が出来る。

### C7、D7区の貝層及びその出土土器群のあり方について

第3図に Z として示した地域に良好な貝層が出土し、第2次調査はここを中心にして調査を行った事は先に述べたとおりである。結論的にはこの貝層も整地により移動させられたものであり、原状態を保つてはいない事が判ったが、この貝層中より出土した土器を分析した結果、この貝層は条痕文系土器群の中でも特に堅式玉期～水神平期に形成されたものである事を知る事が出来た。この貝層中にもやはり須恵器及び陶質土器等が若干混ってはいたが、それは極く限られた

範囲であり、特に新しい時期のものはD 8区西南隅に限られた事、従ってD 8区南隅が後世（貝層の移動、堆積後）さらに擾乱された事を意味していると考える事が出来た。又少量混在している須恵器も貝層を形成している貝等より見れば貝層形成時のものとは考える事が出来ないので、今は除外して考えて良い。貝層中の縄文式土器は極く少量の晩期前半に属するもの（図版VIの上段最上列）を除けば、全て条痕文土器及び同時期のものと考えられるものであった。中に弥生中期初頭と考えられるものが3片程含まれていたが、（図版VIの上段、最下段右、及びVIの下段最下段右から2番目）これは極く近接するものであり、同様なものと見て良かろう。とすれば整地作業の時もその貝層を中心にかなりまとまった形で運ばれた事を知り得る。従ってこの貝層はこの層より最も多く出土する土器によって示される時期に形成されたと考える事が出来。この貝層は原状態を保っていないと言うものの縄文晩期末条痕文土器によって示される時期に形成されたという事になる。他の貝層が種々のものが混在し荒れているので、比較的貝殻の保存の良いこの層で貝類のブロック採集を行った。VI章に述べられている貝類はこの層出土のものである。

東海地方においてこの時期に貝層を形成している貝塚は少く、歷代の大貝塚が数多く存在している三河湾沿岸でも吉胡貝塚、保美貝塚等でも貝層を形成せず、最上層に発見されており、わずかに樅王貝塚、伊川津貝塚に貝層が形成されている事が報ぜられているのみである。両貝塚共に標王式土器あるいは水神平式土器に属するようであり、他は濃尾平野に存する西志賀貝塚及び貝森山貝塚を含む朝日貝塚群を知るのみである。見性寺貝塚のある今の浦周辺では最近西貝塚の西南隅の水田下に厚さ30センチ程の水神平式期の貝層が及んでいる事が発見され、この期に貝層の形成されていた事が確認された。石原貝塚でもこの期の土器の出土は知られているが、貝層を形成していたか否かは不明である。見性寺貝塚で水神平式期の貝層が形成された事が確認された事により、今の浦周辺では2ヶ所の貝塚でこの期に貝層が形成されていた事を知り得た。この事については後にもう一度触れよう。

#### A 7区、青黒色粘土層出土の土師器

A 7区の貝層下の青黒色土層と名付けた層中より土師器が14個体出土している。出土状態は図版III及び第4図に示したとおりである。何らかの遺構に伴うものであるか否かは不明であるが、調査区内では遺構と認められるものは全く発見されなかつたが、後世の擾乱、移動等は全く認められず、この時期の土器の一括資料として興味あるものである。

以上各調査区で擾乱が激しかったので、問題を持つ地域の3ヶ所について出土状態の説明とそれから考え得る事について述べた。



第4図 A 7区土器出土状態

## 調査区の断面観察

次に多少重複する点もあるが調査区の断面観察の結果について述べよう。

各調査区の東と北の面の断面図を作成し、それを連続する事によって遺跡の構成を知る事に努めた。第5図に4本の断面図を示したので、それに沿って説明しよう。

A A列のA1区からA10区の両壁の断面である。図では未調査区のA2、4、6、8、9にあたる地区は省略して断面図をほぼ連続してある。A列は遺跡附近の現状により、台地の最も南側にあたると思われる部分に設定したものであるが、調査した結果地形が変形されており、元は台地の縁辺部より外側に出た部分で後世整地作業により、埋められた地域である事が判った。

表土層（A）は竹藪を梅林の間の溝を掘った土を置いたり梅林の耕作をした関係上、各区共に多少の変化があるが、50センチ程の厚さである。表土層が厚いのはA列のみであり、他の区では薄く、草が生えて腐植土が堆積した部分だけで、すぐ下は硬く突き固められた基壇を形成している。繩文式土器から弥生式土器、土師器、須恵器さらには陶質土器あるいは近世陶器まで実に種多なものを出土する。その大半が小破片である。

A1区では表土層下に黒色土層（B）があり南側に急に厚くなっている。これは南に急に傾斜した地を埋め立てたものである。中に瓦を初め雜多なものが含まれているが瓦は古いものでは奈良時代と考えられるものがある。黒色土層の下に黒褐色土層があり、これと同じものはA3区にも現われている。黒色土層同様南と西が厚くなり、埋めたてに使われた土である事が判る。さらにその下に混疊黒褐色土層があるが、A1区ではそこまで掘り下げる事は出来なかった。この層中には繩文式土器を初め石器及び獸骨等がかなり出土している。先にも述べたようにA5区ではこの層中に入骨が出土している。この下に貝層がある。泥土貝層と呼び得るものである。貝の破碎されたものが多く、又繩文式上器だけでなく土師器、須恵器等の小破片を含んでいる。さらにその下に青黒色粘土層（C）がある。

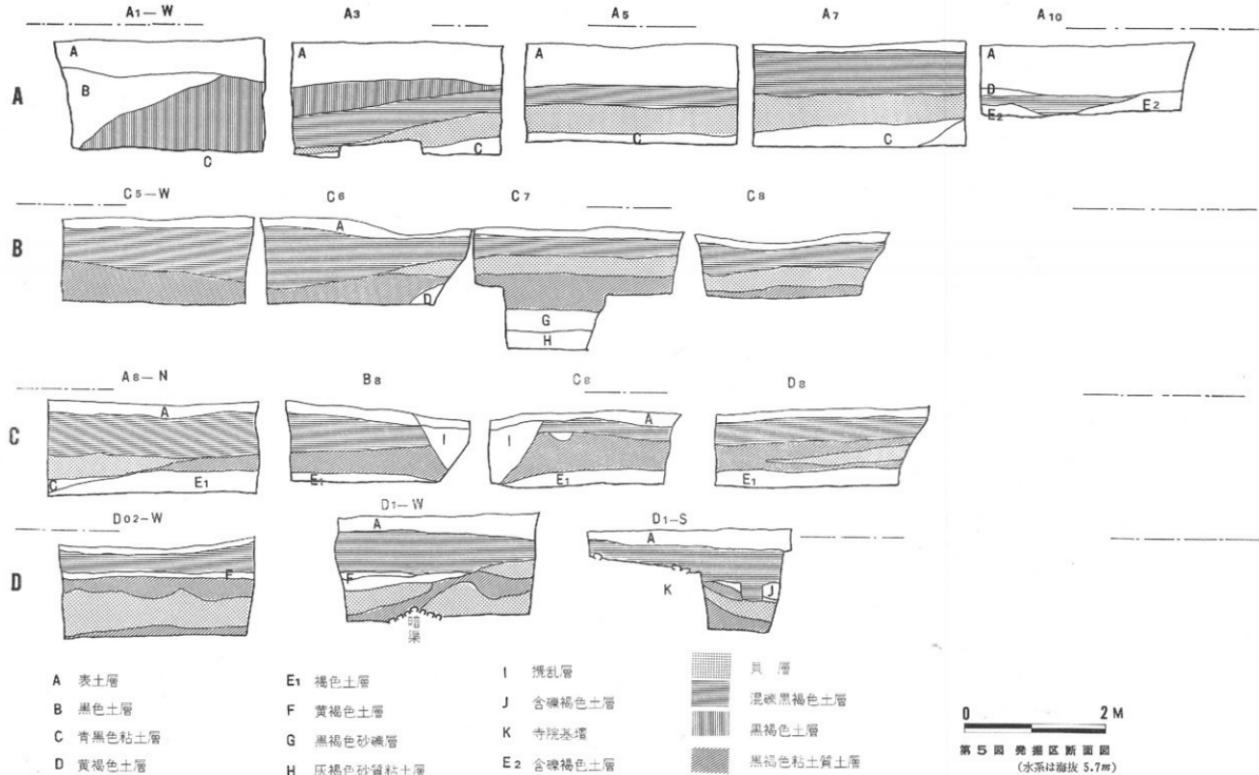
A7区の青黒色粘土層の最下層、黃褐色土層（E1）の直上より土師器が一括出土しており、この層が古墳時代のものである事が確認されそれ以上の層が全て整地、再堆積されたものである事が明らかになった。A10区においてはこの青黒色粘土層（C）及び褐色土層（E1）も一部削平されており、混疊黒褐色土層が直接含疊褐色土層（E2）の上に乗る事になった。含疊褐色土層（E2）は磐田原台地の基盤を成す砂疊層と同じであり、褐色土層（E1）は各地でその上に乗っている赤土層である。従ってこの遺跡は褐色土層（E1）を基礎にその上に乗る青黒色粘土層（C）の下あるいはその間に入るべき土層（全て削平、整地されて今は無い）の上に形成されていたと考えるべきである。

※ 図示しなかったが奈良時代と考えられる瓦は平瓦で3点程ある。瓦の年代等については望月薫弘氏の御教示による。

**C** A列に直交する形のA 7区、B、C、Dの8区の北壁断面である。A 8区に梅の木があり発掘出来なかつたので1区画面側に寄つた形になるが、断面の観察によれば、土層はほぼ連続しているようである。A 7区の北壁では貝層下に黒褐色粘土質土層があり、褐色土層（E 1）の上に乗つて、比較的安定した層のように見えるが、C 7区西壁に表わされた状態によれば整地層である事は明らかであり、従つてA列に現われている貝層及びD 8区に見える貝層が再堆積のものである事が判る。この層からも縄文式土器のみでなく、弥生式土器等のものが含まれている。さらに西の末端（A 7区）では青黒色粘土層（C）の上に乗つているものと思われる。従つて台地上に延びていたであろう青黒色粘土層もすでに削平されている事が理解される。又C及びD列になると表土直下の混疊黒褐色土層は強く突きかためられた面が何枚か確認された。恐らく建築遺構に關係するものであろう。

**B** C 7区、C 8区等に現われていた貝層の広がりを示すものである。発掘区平面図（第3図）にも示したようにA 6区の東側から、さらにD 8区に及んだ貝層は水神平式土器を中心とする条痕文土器を中心に出土した。出土状態について説明したように、おそらく单一に近い条痕文土器の包含層を成していたであろうが、C 7区及び、C 6区で明らかなように整地され運ばれたものであった。

**D** D 02区、D 1区の西壁である。参考にD 1区の南壁を示した。両区共に混疊黒褐色土層と黒褐色粘土層の間に洪積層の黄褐色土層（F）が入り、埋め立てて行く順序を示している。さらに貝層中に須恵器が出土し（図版Ⅲ下段）貝層の移動された年代を知る手掛りにもなる。さらにはD 1区では暗渠排水の施設が現われた。さらに下に貝層は強く表土下1.2メートル程で湧水が出たために調査を終つた。D 1区の南壁にも示したがD 1区東側半分に強く突き固め、その上に礫を敷いた部分が発見され、建築遺構の一部、おそらく建物の外側の犬走りにあたる部分ではなかろうかと思われる。さらにその南側60センチの所に含礫褐色土層（J）を掘り込んで、雨落ち溝と思われる深さ30センチ、幅30センチ程の溝が発見されている。この石敷はD 6では確認されていないのでそこまで延びていないが、あるいは後に破壊されている可能性もあるので、この石敷に伴う建築物の規模は全く不明である。



第5回 発掘区断面図  
(水系は海拔 5.7m)

## 第五章 出土遺物

見性寺貝塚の調査によって採集し得た資料は人工遺物としての土器、土製品、瓦及び石器があり、自然遺物に食糧残滓としての貝類、魚骨、鳥骨が出土している。他に人骨が出土している。遺物は先にも触れたように各時代に及んでおり種多なもののが混在している。その全てについて触れ得るものではないので、ここでは調査の主たる目的に従って縄文弥生時代のものを中心にし、それ以後のものについては一部を図示すると共に簡単な説明を付けるという事に止めた。

### 縄文時代の遺物

整理箱にして約50箱に及ぶ出土資料のうち大半は縄文式土器であり、その全てと言え得るものであった。それらの土器を年代的に大きく7群に分けた。以下それらについて簡単に述べよう。

#### 土器の分類

##### 第1群土器（拓1～4<sup>9</sup>）

4片のみであるが、関東地方の壺之内I式土器に近いと考えられるものであり、口縁部に沈線を施したり、あるいは口唇部に点列を施し、肩部に網文を施したものである。共に深鉢形土器である。

##### 第2群土器

a類（拓6～10）磨り消縄文手法により幾何学的文様を描いた土器である。縄文原体は節の細い2段のR Lの縄文である。拓6は口縁部に凸帯をめぐらし、そり上にキザミを施している。器面は良く研磨してあり、胎土は良く精選し焼成は巧緻である。関東地方の壺ノ内I式土器と考えられる

b類（拓5）1片のみであるが、口縁の外側を肥厚させ、その上に縄文を施し、縄文の上に沈線により文様を描いている。器面は黒色を呈し、焼成は緻密であるが胎土はさほど良くない。中国地方のいわゆる縁帶文土器の仲間であろう。

##### 第3群土器（拓11、12）

拓11は口縁部がやや外反し稜を持って張った肩部を持つ深鉢形の土器であろう。文様を施した肩部の破片であるが器面は良く研磨し、黒色を呈している。12は恐らく注口七器の肩部破片であろう。関東地方の加古利B I式土器との関連を示すものである。

※図示した拓本及び実測図はそれぞれ通し番号を付けた。拓本は本文中の番号の前に拓と記し、実測図は番号の前に図と記した。

#### 第4群土器

口縁は外反し胴部で棱を成して折れ曲る浅鉢形あるいは深鉢形土器が中心である。胴部に付けられた文様によって4に分けられるが、共に焼成は良く灰褐色を呈するものが多い。他に巻貝による条痕を器面全面に付した粗製土器が伴う。

a類（拓13～16）胴上部に指頭を使ったと思われる太く、深い沈線を施したものである。沈線の数は3本～4本である。口縁は平縁を成すものと波状を成すものがある。

b類（拓17～22）aと同様な器形の土器であるが幅広く浅い沈線の代りに巻貝を縦に用いて沈線を描いたものである。従って沈線の内側に細い条痕が幾本か通るのが特徴である。量的には比較的多かった。

C類（拓23、24）2片のみである。細い棒状施文具によって文様を施した鉢形土器である。

a、bに比較すると沈線は細いが、深くしっかりと描かれている。

d類（拓25、26）棒状施文具によって描かれた沈線間に網文を施したものである。網文は2段LRのものであろう。拓26は耳状の突起を持っている。関東地方の首谷式あるいは安行I式との関連を示すものである。

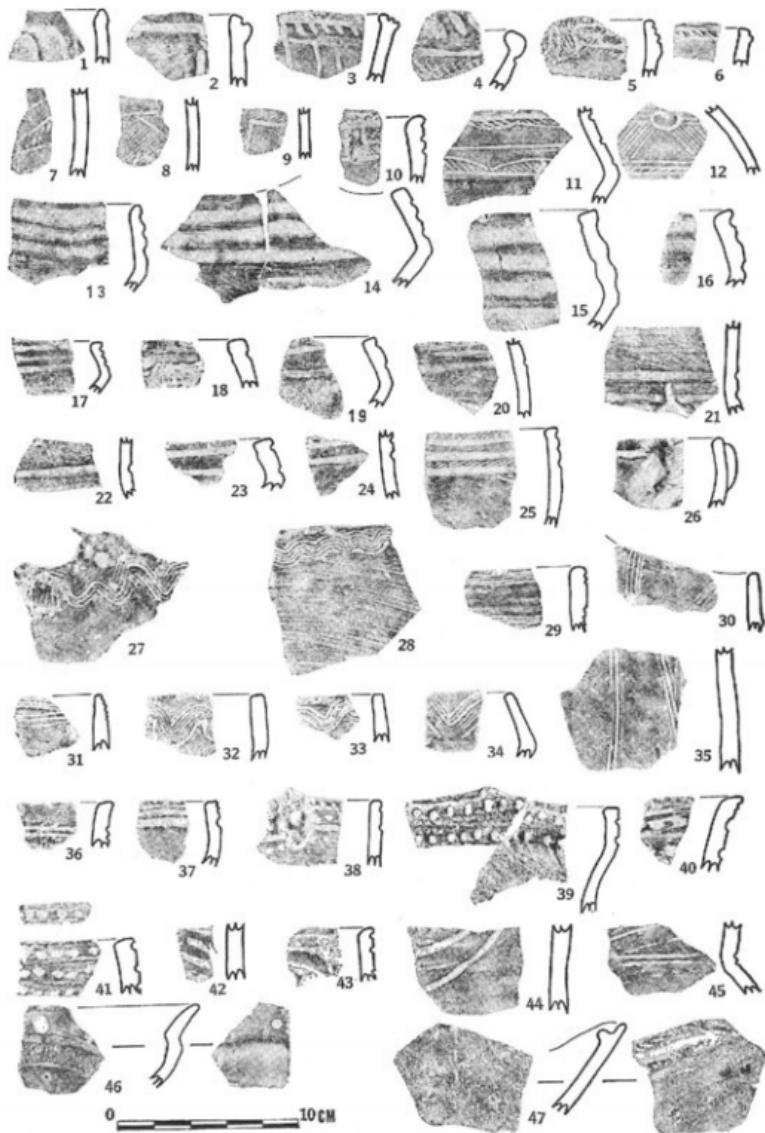
e類（拓48～67、84～86）巻貝による条痕を器面全面に施した粗製土器である。東海地方において從来巻貝の条痕による器面整形の土器は網文後期後半であり、晩期にはないと考えられていた。（山内1952）。その後この種の土器のうち晩期初頭に降るものがある事がだいに明らかにされ（紅村1963）現在晩期前半まで残る事がほぼ共通に理解されている。しかしその中心が網文後期にあるには変りがない。筆者はかつて愛知県神谷沢遺跡において、後期最終末に位置付け神谷沢I式土器と呼んだものにこの種の土器が多量に伴い、晩期前半の土器には少ないという結果を得た（桜井、平野1968）。したがってここでは第5群土器に含まれるものがあるかも知れないが、その類別が今の所はっきりしないので、全てをeとして第4群土器に含ませておく事にする。この事については後に触れよう。

#### 第5群土器

見性寺貝塚の中心的部分を占めるものである。精製土器（c類）半精製の土着の土器とも言べきもの（a、b類）及び粗製土器（d、e類）と三つに大別し得る。もちろん量的には粗製土器が圧倒的量を占めている。

a類（拓27～37・図1、2）横描の沈線を持つものである。これらは文様の施文位置によって口縁部のみに施文されるものと、胴部全体に施文されるもの（拓35）とに分ける事が出来る。さらに口縁部の形態は波状口縁を成すもの（拓27、30）と平縁のものとに分ける事が出来る。それらの組合せによって理論上は4つの類別が可能であるが、その全ての組合せがあるというわけではない。以下器形と施文位置に従って分けながら説明しよう。

イ（拓27）波状口縁を持ち、口縁部のみに施文するもので、器面は凹凸があり、成形、焼成共にあまり良くない。胴部は巻貝による条痕が施されている。



第6図 土器拓影 1

ロ (拓28、29、31~34、36、37) 口縁部は平縁を成すが、やはり口縁部のみに施文するものである。文様は波文になるもの (拓28、32~34) と平行線になるもの (拓29、31、36、37) との二者がある。量的には小破片が多く実際の個体数より増加しているようにも見えるが、それを割引いても平縁を成すものが多い。

ハ (拓30、35) 波状口縁を成し器面全面に文様を施したものである。小破片であるが、器面整形及び焼成も良い。量的には多いものではない。

b類 口縁部を直立あるいはやや内傾させた深鉢型を成す土器で、波状口縁を成すものもあるが、大半は平縁である。赤褐色を帯び焼成は比較的良いが胎土は悪く意外にもろい土器である。これも文様を中心に二つに分けて考える事が出来る。

イ (拓38、40) 口縁部に2~3条の沈線を施し、沈線面に棒状の施文具により点列を施した土器である。拓38は一部に凸を持っています。

ロ (拓39、41) 口縁部に円形の棒状施文具による刺突の点列文を施したものである。拓41は口唇部にも同じ文様を施している。

c類 (拓42~46) 精製土器で関東地方の土器の影響を強く感じさせる土器であり、量的には多いものではない。拓43は彫刻手法による三叉文が見え、拓45は壺形を成すらしく沈線を点列文で飾られている。拓46は浅鉢形というより皿形を成すものであり、副部に施した横2本の平行線間に細い縦の沈線によって埋めている。安行Ⅱ b式あるいはⅢ c式の流れを汲むものであろう。

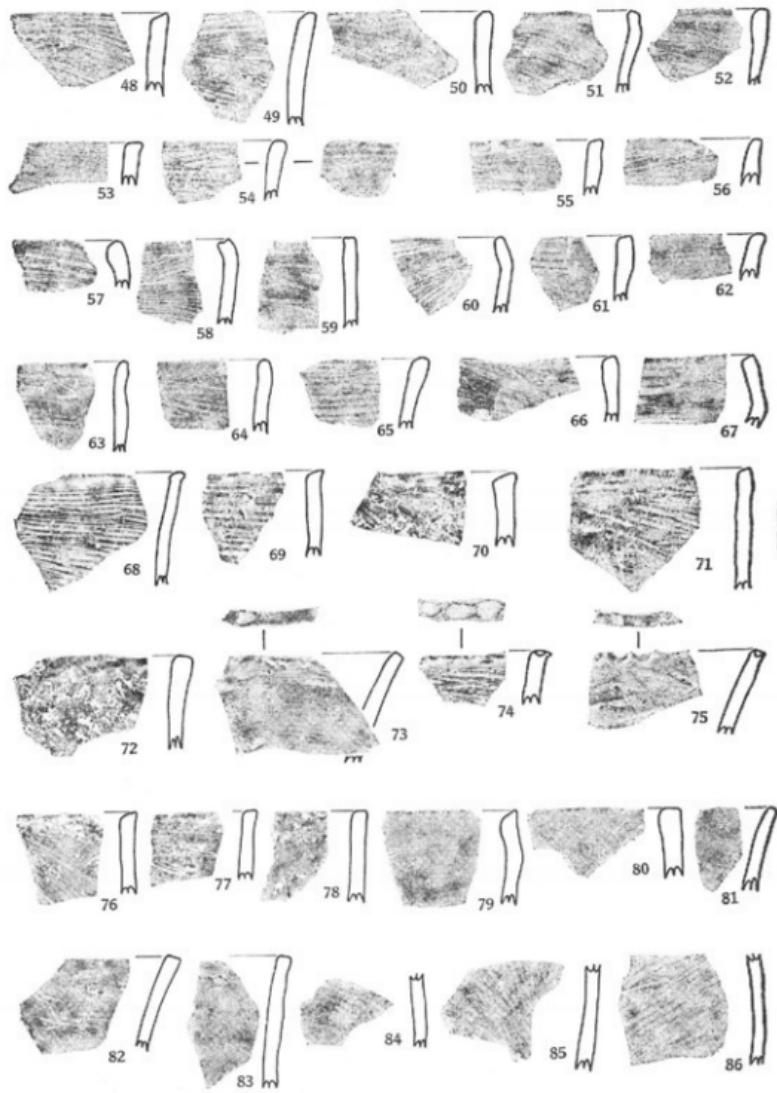
d類 (拓68~77、図3) 器面全面に削痕あるいは刷毛目を残した深鉢形の粗製土器である。次のe類あるいは第4群e類としたものと共に本遺跡の中心的量を占める土器群である。口唇部に3ヶ所あるいは4ヶ所に刺突文あるいはキザミ目を施すもの (拓73~75) がある。

e類 (拓79~83) 無文の土器である。全てが第5群土器に含まれるものではなく、一部は第3群4群あるいは第6群土器に含まれるものであろうが、大半は第5群に含み得ると思われる。

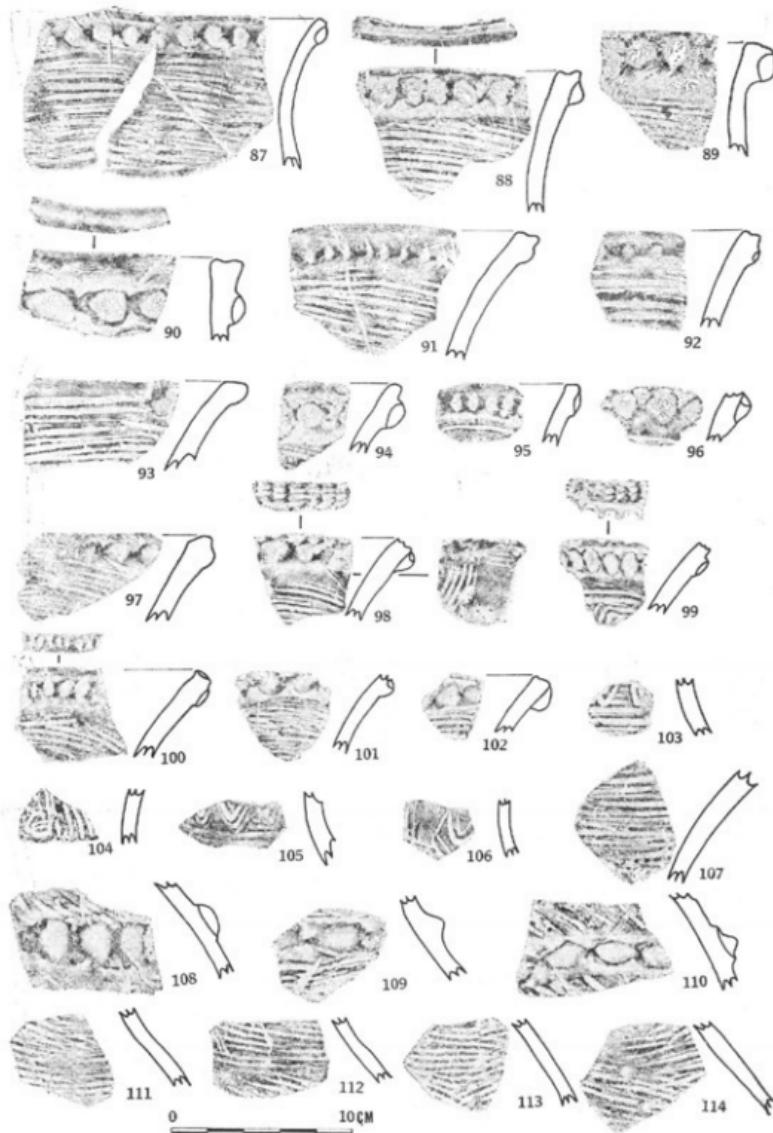
#### 第6群土器

a類 口縁部に凸帯を巡らせ器面全面に荒い条痕を施した所謂条痕文土器である。これは壺及び甕に分かれる。

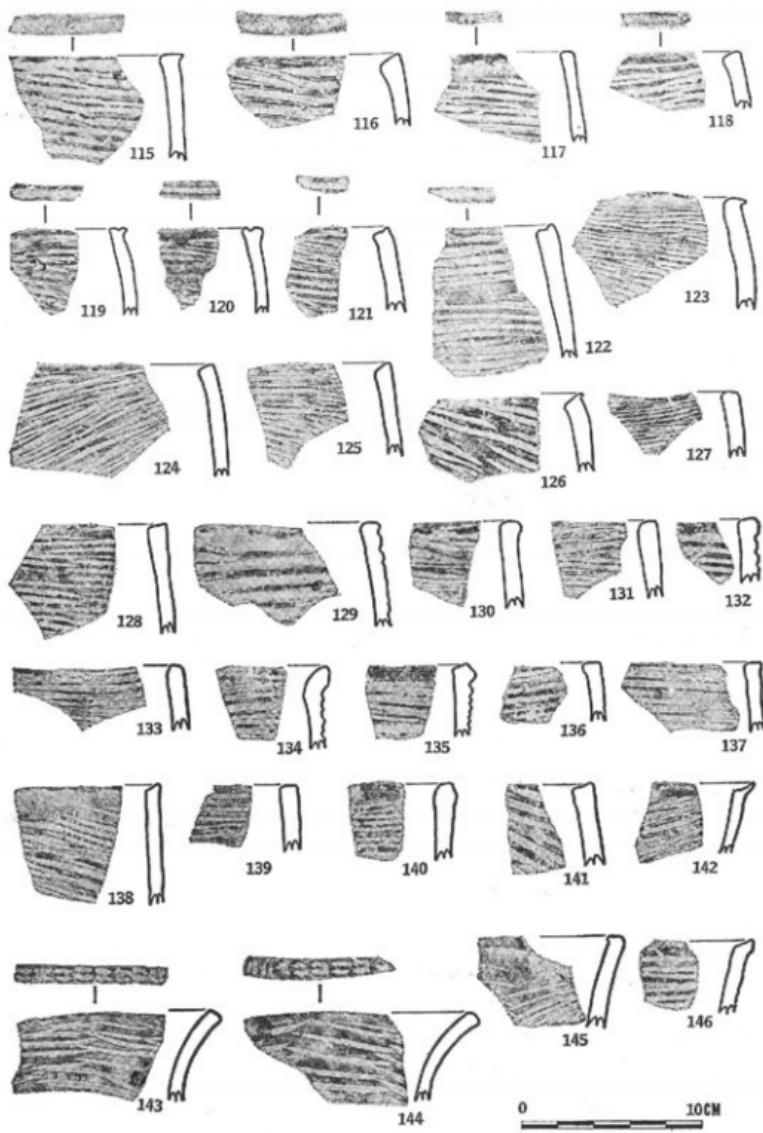
壺形土器 (拓87~97、107~110、166~173図4・5) 口縁部に巡らした凸帯の上に指頭あるいは棒状施文具による押引文を施し、器面全面に棒状施文具による單方向の荒い条痕を施した土器である。見性寺貝塚には貝殻腹縁による条痕の施された土器は出土しなかった。各遺跡によって多少の差異はあるが、遠江地方及び三河信濃にかけての山寄りの地域には貝殻腹縁による条痕は少いようであり、これらの地域では少し遅れて弥生中期初頭のものに貝殻腹縁による整った条痕が多い。又拓108~110の如く副部にも凸帯を巡らし、口縁部と合せて2条の凸帯を巡らすものもある。口唇部は拓88、90に示したように中央部を指頭あるいは棒状施文具によって押してやや窪みかけんにし他に何の施文もない。又頸部あるいは上脣部に波文を持たないのが特徴であり、紅村氏による櫛王式土器 (紅村1963) あるいは水神平Ⅰ式土器の特徴を備えたものである。



第7図 土器拓影2



第8図 土器拓影3



第9図 土器拓影4

甕形土器（拓115～141・図6～10）棒状施文具による単方向の荒い条痕を施した土器である。条痕文土器の大半はこれによって占められている。口縁はやや内傾し、張り気味の胴部を持っている。又口唇部は中央がやや凹んでいるもの（拓119～122）あるいは平坦なもの（拓115～118）等がある。

b類（拓158、159）亀ヶ岡式土器の影響下に成立した所謂浮線網状文を施した土器である。2点のみであるが、器面は良く研磨してある。

#### 第7群土器

a類 壺（拓98～106、175）口唇部に貝殻腹縁による押引文を施し、口縁部には指頭あるいは棒状施文具による押压文を施した条痕文土器である。条痕は頸部から上胴部までは単方向であるが、胴部は紙の羽状を成す（175）。頸部には棒状施文具による波文が描かれている。又まれには拓98の如く口縁部内側に施文する場合もある。

甕（拓142～146・図11）外反した口縁部を持ち、口径の大きな甕形土器である。器高に比べ口径が大きくなり、鉢形土器に近づいたものである。口唇部には押引文を施し、器面全面に施された条痕は縱羽状を程している。

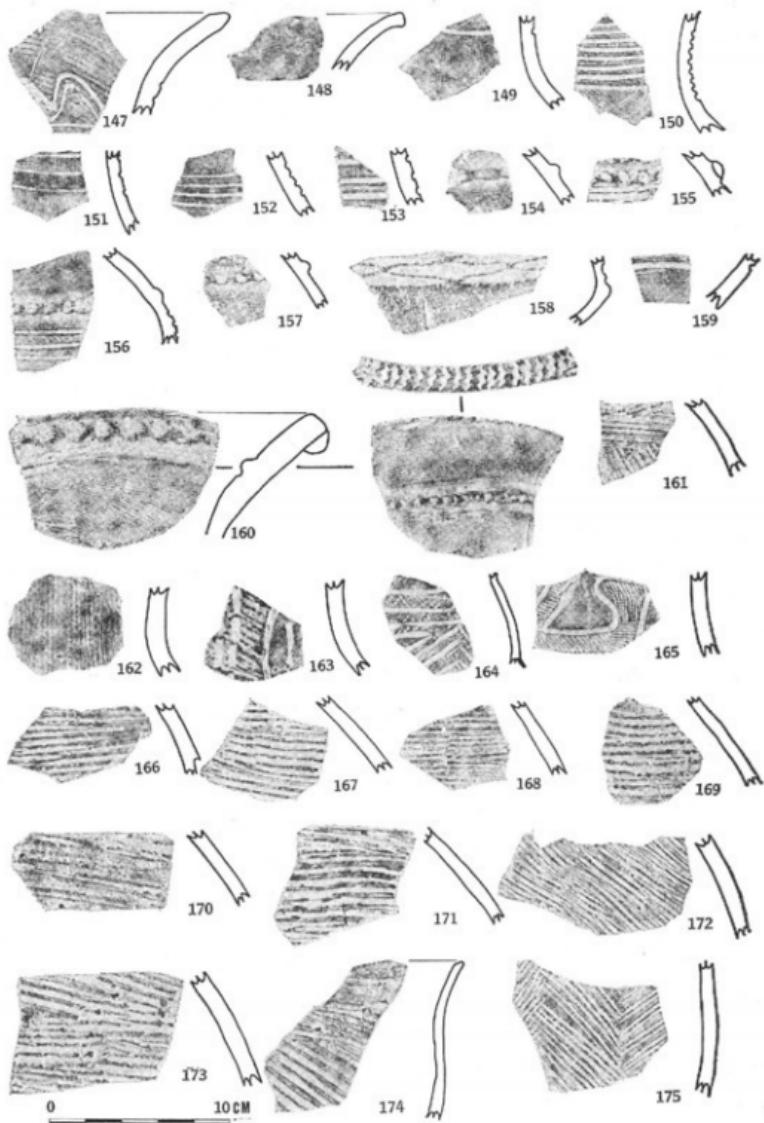
b1類（拓148～157）遠賀川式土器である。全て赤褐色を程し胎土・焼成共にあまり良くななく紅村氏のいう直流の遠賀川式土器である。全て壺形土器であるが、拓149、151の如き器面に刷毛目を残しており、かなり変形したものである事を知り得る。この類の土器が全て第7群に含まれるものばかりではなく一部は第6群に含まれる事は早くから知られている事である。後にも述べる事であるが壺王式土器に伴う遠賀川式土器は比較的古手のものが伴うとされている。しかし10図に示した土器には古いと考えられるものがない。しかしこれらの遠賀川式土器を全て第7群に含まれるものとすると、条痕文土器に対して遠賀川式土器の占める比率がかなり高くなり、不自然な感を受けないでもない。

b2類土器（拓147、160）一見しただけではとうてい遠賀川式土器とは思えない程変形したものであるが、条痕文土器とも異り、いわば折衷型とも言うべき土器である。

#### 土器の編年及びその他の検討

以上見性寺貝塚出土の縄文式土器を7群に分け、その観察をおこなったが、その編年的位置等について多少述べてみよう。

第1群土器 見性寺貝塚出土のうち最も古い時期を示すものであり、関東地方の掘ノ内I式風の土器である。この期の土器は磐田市石原貝塚（市原1962）で貝層下に中心的な存在を示し、又西貝塚（麻生1961）の貝層下混貝土層中からも出土している。さらに天竜川を越えて西側浜松市蜆塚遺跡に出土している。太田川の東、袋井市大畑遺跡（岡本勇1951）では掘ノ内I式に平行するものが大畑Iと仮称されている。このように大畑貝塚西貝塚、石原貝塚、蜆塚、そして見性寺貝塚と遠江地方における縄文時代の貝塚はほぼこの期に遺跡としてはっきりして来る事が知られさらに次の第2群とした時期には各遺跡とも貝層を形成し始めている。



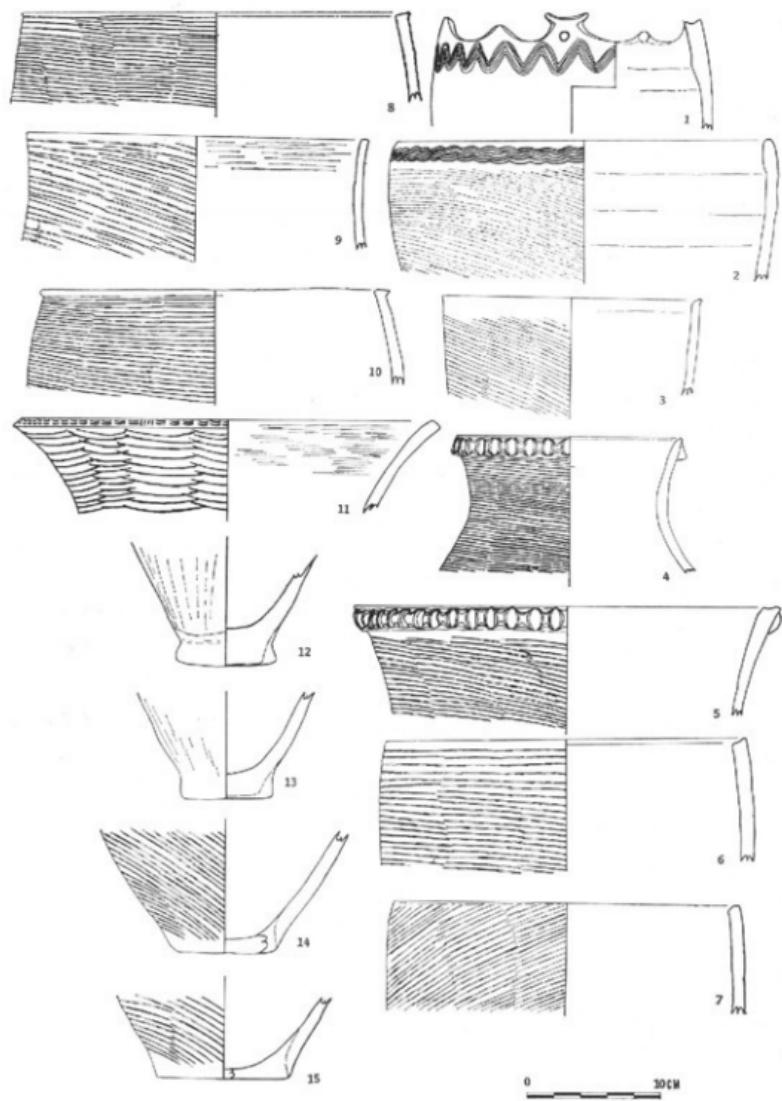
第10図 土器拓影5

第2群土器 脚部に幾何学的な磨り消細文を有する土器群は蜆塚遺跡において貝層を形成すると共に大量に出土し、注目されてきた。蜆塚I式（麻生、1962）あるいは第Ⅲ型式（長田、向坂1961）土器等と呼ばれたものである。b類とした縁帶文系の津雲A式土器がこの期の土器に伴う事は蜆塚遺跡の調査において何人かによって述べられている。第2群の土器は遠江地方の各貝塚でも出土している。又愛知県龜山貝塚（清野1969）はこの期の良好な資料を出土している。

第3群土器 関東地方の加曾利BⅡ式土器と関連の深いものであり、拓11、12に示したものはそのまま加曾利BⅡ式といい得る土器である。遠江地方におけるこの期の土器は地域的特徴を強く示す、言ってみれば土着的色彩が強くなる事がしばしば指摘されており、又加曾利BⅡ式土器類似のものは量的には少く、むしろ客体として存在している事が指摘されている。（向坂、1961）。量的には多くはないが、佐久間町半場遺跡（向坂、1971）、水窪町向市場遺跡（植松・平野1965）掛川市上の段遺跡等この地域の各遺跡でしばしば見られる。又愛知県八王子貝塚に良好な資料がある。蜆塚遺跡において第Ⅳ型式（長田・向坂1961）あるいは蜆塚Ⅴ式（麻生1962）とされたものの一部である。

第4群 宮瀬式土器風のものを一括したが現在東海地方においてこの種の土器にいくつかのものが含まれている事が知られている。a類とした幅広く浅い沈線を施したもののかつて西貝塚において宮瀬式土器古と呼ばれたもの（麻生・市原他1962）であり、蜆塚遺跡において蜆塚Ⅵ式（麻生1962）あるいは第七型式（長田・向坂1961）宮瀬式土器古（内藤・市原1961）等の名で呼ばれたもの的一部がそうである。近畿地方において幅広く浅い平行沈線及び沈線間に細い斜線を持ち卷貝の先端による点列文を有する土器は元住吉山Ⅱ式土器として宮瀬式土器より分離される事はすでに述べられており（坪井1956、岡田1965）東海地方においてもこれらの土器が、宮瀬式土器でなく元住吉山Ⅱ式に平行すべきである事については筆者もすでに触れた事がある（桜井・平野1966）。

b類としたものは卷貝を縦に引っぱった平行沈線を数条巡らし、沈線間に扇状圧痕を施す宮瀬式土器に平行するものである。この遺跡では扇状圧痕を施した土器は出土していないが、代りに八字状の文様をつけたものがある（拓21）。扇状圧痕を施したものと八字状の文様を施したものとの同時性についてはなお、検討の余地があるが、最近その同時性が主張されている（向坂1968）ので、ここでは一応それに従っておく。東海地方において扇状圧痕を持ったこの種の土器は吉胡貝塚、伊川津貝塚（久永1972）、蜆塚、西貝塚、半場遺跡、奥泉遺跡等かなりの遺跡で知られているが、必ずしも同一ではない。近畿地方で宮瀬式土器はその内容が厳密に考えられているようなので、東海地方におけるこれらの土器は宮瀬式土器とは異なるものと考えた方が良いのかも知れない。蜆塚Ⅵ式（麻生1962）あるいは蜆塚七型式（長田・向坂1961）と呼ばれたもの的一部はこれと相当するものである。又種々のものを含んでいるが吉胡下層式土器（久永1972）と呼ばれたもの的一部もこれに相当する。この土器が関東地方のどの土器に対比し得るかについて、一般的には古く山内清男氏以来の宮瀬式土器は近畿地方の縄文時代後期最末に位置するという命題を受け



第11図 土器実測図

て、ほぼ機械的に関東地方の後期最末と考えられる安行Ⅰ式に対比している。しかし最近宮滻式土器に対比するのは安行Ⅰ式土器でなく安行Ⅱ式土器ではないかとする見解が出されている（向坂1968）。筆者もかつて愛知県・神谷沢遺跡において、これに後続し、後期末に位置すると考えられたものを神谷沢Ⅰ式と仮称し、この地域の後期最末の土器群の再検討を呼びかけた。早く実測図が紹介され、この問題を解く鍵を握るとも考えられた伊川津貝塚の安行Ⅰ式土器が、最近の報告書によれば宮滲式土器に後続し雑多なものを含んではいるが、ほぼ神谷沢Ⅰ式土器に類似すると思われる伊川津式土器に伴うものとされている（久永1972）ので、宮滲式土器に平行する土器群（4群b類）はそれ以前安行Ⅰ式土器に平行するものと考えて良いであろう。

c類としたものもb類同様小破片であり、詳細ははっきりしないが、平行沈線の施文具が巻貝から棒状の施文具に代り、沈線が細くはっきりして来ている。恐らく巻貝による扇状圧痕が付く事はないであろうし、代りに綫の沈線によって画するものになるであろう。とすれば先にも触れた神谷沢Ⅰ式土器を考え事ができる。同様な土器は浜松市観塚において観塚Ⅰ式呼ばれたものに相当し又伊川津貝塚で伊川津式土器の名で呼ばれたものの大半はこの土器である。又和歌山県岡崎遺跡（森・藤井1965）において扇状圧痕を伴った宮滲式土器とは異り、比較的細い沈線による土器をB類2群として類別している。近畿地方においてこうした類別が可能であるとすれば、宮滲式土器に後続し我々の神谷沢Ⅰ式土器に相当するものの存在を考え事ができよう。編年的には先にも述べたように伊川津貝塚で安行Ⅰ式土器を伴出しいくつかの遺跡で貼付土器に伴出する事が述べられているのでやはり編文後期最末に置くべきであろう。

d類 精製土器であり、拓25は平行沈線間に繩文を施しあるいはb類としたものに伴出するものかもしれない。又拓26は耳状突起を持ち関東地方の曾谷式あるいは安行Ⅰ式に対比し得るかもしれない。とすればb類としたものに伴出したとして良いであろう。

e類 巷貝による条痕と器面全面に施したものであり、4群a類、b類あるいは一部は第5群上器に伴うものかもしれない。以上第4群としたものは年代的幅を持ったものであり、本来別にする必要があるものであるが、資料的にさほど多いものではなかったので同じ群にまとめておいた。以上述べてきた事をもう一度図式的に整理すれば次の如くである。

近畿地方	見性寺貝塚	関東地方
元住吉山Ⅰ式	第4群a類・e類	曾谷式
宮滲式	第4群b類・d類・e類	安行Ⅰ
(i)	第4群c類・e類	安行Ⅰ

第5群土器は第6群・第7群土器とした条痕文上器と共に見性寺貝塚の中心的部分を占めるも

のであり、遺物の出土状態において述べた如く、第6・7群土器が比較的まとまって出土したのに対して、第5群土器は各調査区からまんべんなく出土しており、すでに破壊された貝層にこの期のものが存在した事が、充分考えられる。a類としたものは久永春男氏によって大宮式土器と呼ばれたものである。

大宮式土器は東三河及び遠江を中心に分布し渥美半島の吉胡貝塚、伊川津貝塚では西三河から尾張を中心に分布する寺津式土器と相半ばして並存する事が言わされている。さらにそうした現象は吉胡貝塚、伊川津貝塚のみの現象であり、これについて「寺津式土器を用いた一単位集団と大宮式土器を用いた一単位集団」とがこの渥美半島の地で合流し新たに一集団を組織するに至ったのではないか」との見解があるが（久永1972）が、土器形式の混在、あるいは共存という事、あるいは土器形式そのものをそうしたものに短絡的に結びつける事には多少疑問がある。又寺津式土器と大宮式土器の並存関係そのものについても寺津式土器＝雷Ⅰ式土器の細分の可能性を含めて増子康真の批判がある（増子1966）。

b類とした棒状施文具で口縁部に点利文を施したものは遠江には出土例が少く、わずかに蜆塚遺跡（長田・向坂1960）に少量出土しており、調査者はa類に並行させて考えている。又三河では吉胡貝塚、伊津川貝塚、保美貝塚等に出土しており、さらに我々の調査した設楽澤神谷沢遺跡（桜井・平野1968）あるいは神田遺跡（平野1971）、下谷遺跡等にも少量出土している。やはり分布の中心は西三河から尾張にかけてのようであり、刈谷市元刈谷神社貝塚（谷沢1967）、宮東1号貝塚（谷沢1961）、瀬戸市大六遺跡（久永他1963）、名古屋市雷貝塚（増子1966）、同牛牧遺跡（久永他1961）等で知られ、寺津式土器の名で呼ばれているもの一部である。拓38としたものは継位の突起を持っている。こうした継の突起は安行Ⅱ式土器の影響を考え事が出来、おそらく山梨県中の沢遺跡（向坂1961）静岡県清水天王山遺跡（市原他1960）富士川町浅間林遺跡（稻垣・平野1968）あるいは遠く新潟県燕生遺跡（中川他1967）等に見られる縄文後期末から晩期初頭ものとの関連の強いものであろう。

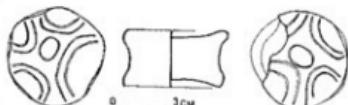
c類としたもののうち三叉文を持つものは安行3a式に近いものであり、拓46は安行3b式に関係を持つものであろう。a類及びe類は粗製土器である。又4群e類としたもの一部もこれに含まれるかもしれないが、西三河から尾張にかけては精製土器の中に巻貝を施文具として使用

※大宮式土器については日本考古学協会第5回総会において久永春男氏により発表されたとの事であるが、型式内容が詳らかでなく、名称のみが先行している感のある土器群である。久永氏によれば蜆塚第3次報告の5群土器及び第4次報告書における5群土器さらには吉胡貝塚第1、第4トレンチ下層貝塚出土土器の一部がそうであるとされているが、報告書によるかぎり、これらの上器が種々のものを含んでおり、I型式として成立し得るか否かは疑問がある。筆者は大宮式土器の主体となるべき土着の土器は見性寺貝塚における第5群a類とした櫛描文の土器と、e類とした粗製土器の一部を中心にして、それに他地域の土器が少量伴うものというように理解している。

しているものが多いのに対し見性寺貝塚には全く見られなかった事を考慮すると第4群e類の土器はこの地域では第5群にまで下る事はないと考えても良いかもしれない。又ここで注意して良い事は、資料の絶対量が不足しているという事があるかも知れないが、吉胡貝塚において山内清男氏が縄文晩期初頭に位置付けて吉胡晩期旧Aと呼んだ（山内1952）土器群中にある口縁部に弧状に連ねる縫帶を持った土器群が欠けている事である。するとここでの第4群土器はそれよりも後出のものを考える事が出来よう。以上述べて来たように第4群土器はこの地方の晩期前葉に位置付ける事が出来、関東地方の安行3b式あるいは大洞BC式に対比し得るとして良い。

第6群土器は紅村弘氏によって櫻王式土器と呼ばれたものにはほぼ一致している。櫻王式土器はその直前の型式である馬見塚式土器（増子1965）あるいは下り松遺跡の土器（大參1972）に比べ条痕文土器の量が卓越するばかりでなく前型式までの土器において特徴的な存在である表面を黒色研磨し脣部で段を持った深鉢形土器が消失し、又大參氏も指摘しているように頭部がすぼまって、口縁が開くかあるいは口縁部の直立する大型の壺型土器の出現に見られるように、かなり型式内容が変化している事が注目される。櫻王式土器は条痕文土器が量的にも卓越し、それが主体として成立し安定した内容を持った最初の土器であると言う事ができよう。しかし櫻王式土器の存在した期間は短く同時に急速に変動する時期であり、大遺跡を形成する事は無く、歴代の大遺跡の最上層に薄く分布したし、あるいは独立した小遺跡として存在しているものが多い。その分布は愛知県全域にかなり広く分布しており、三河の櫻王貝塚はもとより、伊川津貝塚、尾張の西浦遺跡（井口1971、大參1972）名古屋市古沢町遺跡（吉田・和田1971）等で良好な資料が発見されている。さらに伊勢中ノ庄遺跡（谷本1970）でも多量の遠賀川平土器と伴って出土している。又遠江でも殿畠遺跡で水神平式土器と混在しているが、かなりの量の採集されている。さらに東に行って賀茂郡笠原遺跡（小野1971）に、やはり水神平式土器と混在しながら櫻王式土器と言い得る資料が発見されている。

第7群土器 言うまでもなく東海地方に広く分布する水神平式土器である。水神平式土器が遠賀川式土器を伴う事は古くから知られており、特に遠賀川式土器の東限とされる伊勢湾沿岸では遠賀川式土器の比率が多くなり、水神平式土器と量的には匹敵すると言って良い状態を示している。三河、尾張、美濃、あるいは遠江、駿河、さらには伊豆と言った静岡県一円あるいは長野県から山梨県に至るまで水神平式土器には遠賀川式土器が極く少量ではあるが伴出している。拓147～157までに示した土器が全て第7群土器にのみ伴うものか否かについては、なお検討の余地がある。又拓158、159に示した浮線網状文の土器が第6群土器（櫻王式土器）にのみ伴うものではなく、第7群土器にも伴っている事が考えられる。拓147、160に示したものは他に殿畠遺跡に出土しているが、紅村弘氏の言う逆流の遠賀川式土器とも異り、特異な存在である。伊勢湾沿岸のように遠賀川式土器が多量に出土する所では発見されてい



第12図 土製耳飾

いし、又東海地方東部のように遠賀川式土器の影響の少い所でも発見されていない。遠賀川式土器の影響のある程度及んだ地域に特徴的なものであろう。古く使われた言葉であり、使われたニュアンスも異なるが接触、あるいは折衷という言葉があてはまりそうな土器である。

#### 土製品（土製耳飾り）

第12図に示したいわゆる滑車型の耳飾りである。この地域の耳飾りに一般的であるが、胎土、焼成共にさほど良くなく、又周囲も正円形を成さず、凹凸がある。表裏共に二本の沈線により4個の弧線文様を書き、中心に円を描いている。晩期前半、恐らく大洞B C式期に平行するものであろう。

#### 石器

見性寺貝塚の調査において出土した石器は51点であり、他に表面採集による資料を1点(39)を加え52点を図示した。39の資料は戸塚賢二氏によって採集されたものである。

採集された52点のうち最も多いものは石斧であり、打製石斧25点、半磨製石斧14点、磨製石斧1点の合計40点と実に8割に近い比率を占めている。なかでも打製石斧の数は多く全体の5割を占める。

#### 打製石斧(第13図1~23、27、28)

全体を荒く打ち欠いただけの短冊形の打製石斧である。土掘り具かと考えられるものであり、東海地方の晩期後半の遺跡には多量に出土する。見性寺貝塚からは破片も含めて25点が出土している。12は両側に着装用と考えられる抉り込みがあり、薄手である。先端には磨滅の痕がある。28は梢円形の穫の先端を打ち欠いただけであり、石斧とする事に多少の疑問があるが、一応ここに含めた。

#### 半磨製石斧(24~26、29~34、44~47、50)

全面を敲打した後、先端を磨ぎ、刃部を作り出したいわゆる遠州式の石斧である。折損したものが多く44を除いて全て破片である。44は脛部の両側に壊打痕があり、着柄用と思われる。34は小形であり、他とは異なる機能を持ったものおそらく木材の細部加工用の「のみ」のような役割を果した石器であろう。刃部だけを磨いた半磨製石斧はこの地方の縄文晩期の遺跡に多量に出土する。用途は土掘具とは考えずおそらく、樹木の伐採あるいは木材加工用のものであろう。

#### 磨製石斧(35)

全面をきれいに磨いた定角式の石斧である。完形品であるが、一部に刃こぼれがある。

#### 石錐(40~43)

扁平な円錐の両端を打ち欠いて縄線の部分を作り出した石錐である。

4点出土している。

#### 磨り石(48、49、51)

梢円形の穫の周囲に敲打あるいは磨滅の痕のある石器である。石皿と組合わされて使われ製粉機としての機能を持つと考えられるものである。石材は花崗岩あるいは砂岩である。48は半分が

失われている。

#### 石鎌（52）

1点のみであり、基部の一部分が欠けている。従って有柄であるか無柄の鎌であるかは不明である。石材の剝離面を大きく残した荒い作りである。

#### 石棒（36～38）

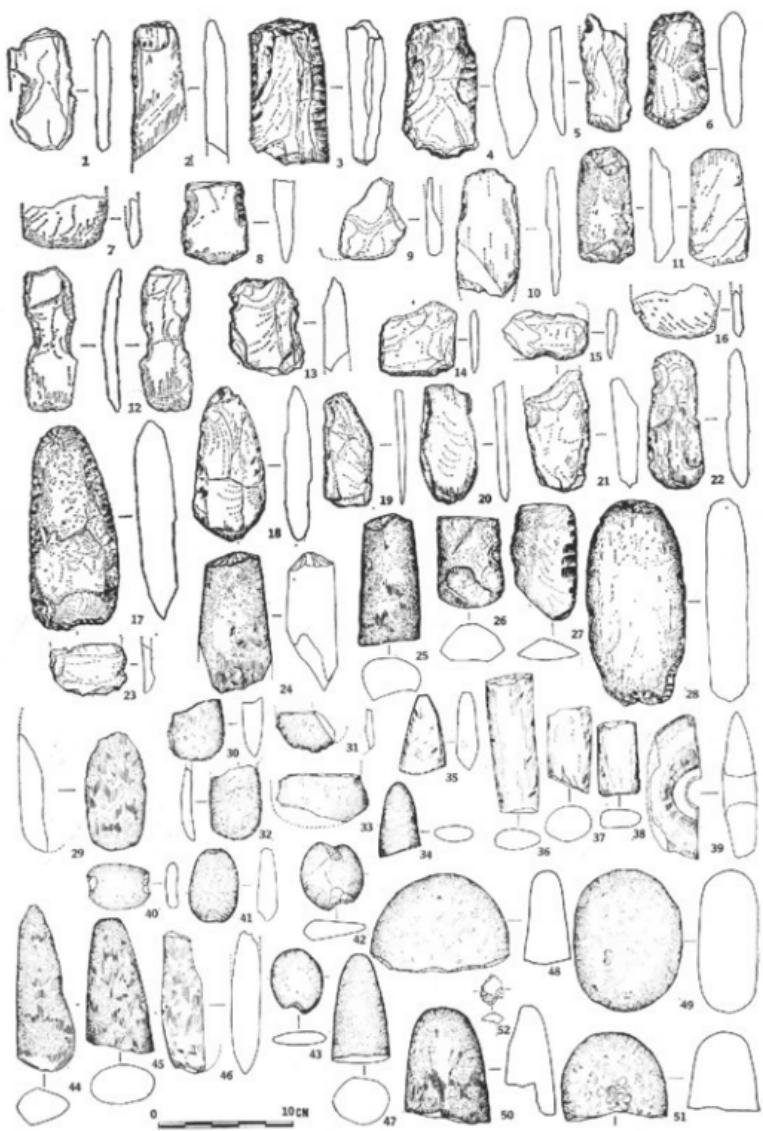
全て破片である。36は断面から見ると峰と刃が作られているようであり石刀と言うべきかもしれない。やはり晩期に多く出土する石器である。

#### 環状石斧（39）

破片であるが本来円形を呈し周囲に刃部を作り出し中央に蓄柄用の穴をあけたものである。石斧の名で呼ばれているが、石斧として使用されたものかどうかは疑問である。

以上見性寺貝塚出土の石器について簡単に説明した。これらを生産活動に直接的に結びつく石器と、例えば石棒のように呪術的な石器と呼ばれる生産活動に直結しない石器とに分けて見ると、石斧、石錘等前者に結びつく石器の数が圧倒的に多い。先にも触れたように、それらのうちでも石斧の占める割合が多い。

東海地方の縄文晩期の遺跡では特にその後半になると打製石斧の数が増加する事が広く知られている。愛知県五貫貝塚、桜平遺跡あるいは馬貝塚遺跡、静岡県佐久間町半場遺跡、三ヶ日町殿廻遺跡等で数10本から數100本に及ぶ石器が出土している。石斧の量、特に打製石斧によって特徴づけられる見性寺貝塚の石器は出土層位も混在しており、単一な出土状態を示したものではないが、その大半は晩期後半と考えてよからう。質、量共に圧倒的な打石斧に比較して他の石器は貧弱である。こうした傾向は同じ縄文晩期でも前半と後半では大きく異なる点である。前半では石斧の他に石鎌、不定形の剝片石器（スクレイバー）等が石器の組合せの中で主要な地位を占めているが、後半ではそれらはほとんど影をひそめてしまう。こうした組合せの変化、特に晩期後半の打製石斧の盛行を初期の農耕と結びつけて考えようとする意見もあるが、それにはなお検討すべき点が残されており、打製石斧の増加を初期農耕に短絡的に結びつける事には疑問がある。特に初期農耕と言った場合多分にそれが水稻耕作と稱作（焼畑）あるいはもっと原始的な管理栽培などが混合して考えられているかのようであり、耕作の対象物、さらには耕作形態についての整理が必要となろう。縄文晩期に続く弥生中期の水稻耕作を見るとこの地方でも中期中葉には定型化し整然とした姿で現われており、縄文晩期後半との間には大きな断層がある。従って打製石斧の盛行と水稻耕作とを直接的に結びつける事にはすこし無理があろう。又水稻耕作以外のものを考えた場合かつて述べられた「縄文中期農耕論」が、思い出されるが、その持った弱点はいぜん克服されてはいないし又地理学、人類学等での分野で述べられている焼畑等も考えられなくはないが、それらの説明が多くが大きく縄文社会全体を、言いかえれば縄文社会の基盤を問題にしており、それが縄文晩期後半に入つてから打製石斧の急激に増加する事への説明としては難点がある。いずれにせよ石斧の用途等を含めてさらに検討の余地がある。



第13圖 石器実測図

又生産活動に直結しない石棒等の特殊な石器は縄文晩期になると盛行し始めその前半に量的にも質的にもピークを迎えているが、量的にはともかく、質的にはその石器の組合せをほとんど崩さずに晩期後半にまで続いている。すると生産用具に大きな変化のあった後もそれ以外の石器はさほど大きく変化していないようである。呪術的な石器の組合せ、言いかえれば、何らかの形で社会の規範を表現すると考えられるものは生産に直結するものの変化のスピードより遅いという事が考えられるようである。晩期後半の壺棺、甕棺墓の盛行、特殊な石器の増加等急激な変化をうかがわせるものがある中でなお、石器の組合せの維持は旧来の社会（規範）の温存のエネルギーを示すものと考えても良いであろう。

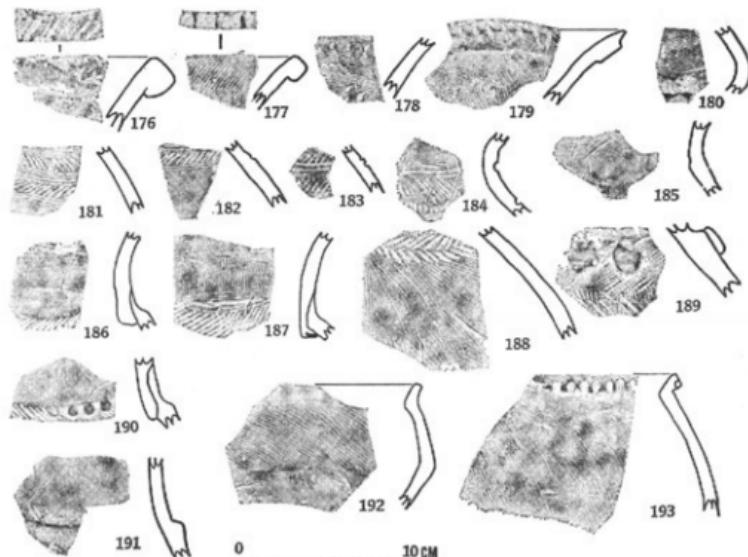
### 弥生時代の遺物

#### 土器の分類

第1群土器 弥生中期初頭に位置づけられる土器である。条痕土器と磨り消繩文を持ったものとがある。

a類（拓161・162）器面全面に貝殻腹縁による条痕を施したものであり、条痕は浅く幅が揃っている。二片共に壺形土器の破片であり褐色を帯び、胎土、焼成共に良好である。

b類（拓163～165）磨り消繩文を持った壺形土器である拓164は小破片であるが、4本の沈線



第14図 土器拓影

によって連続三角文が描かれているものと思われる。沈線間には縄文が施されている。又拓165はどのような文様構成になるか明瞭ではないが、恐らく太い沈線によって区画された雲形文を構成するであろう。これほど明瞭な磨消縄文はこの地域ではめずらしく、他の遺跡での例を知らない。

#### 第2群土器（拓176～193図16・17・18）

弥生後期の土器である。壺、高杯、甕、鉢の4者がある。

壺には中型のもの（拓176～179、181～190、図16・17）と小型の壺（拓180）とがある。量的には中型の壺が圧倒的である。大型の壺は見性寺貝塚からは出土しなかった。壺は文様により以下の三つに分ける事が出来る。

- a 横目文を施したもの、この中には拓178のように扇状文あるいは波文が組合されているものと、櫛による平行沈線間にやはり櫛による斜線を施しているもの（拓181・182）とがある。
- b 縄文を施したもので、口縁内側に施文したもの（拓177）と頸部から肩部にかけて施文したものがある。後者には横羽状を成す事もある。縄文原体は2段LRのものである。
- c 肩部に貝殻腹縫による疑似縄文を施したものである。羽状になるもの（拓188・189）と單方向のものとがあり、肩部に円形の浮文を付しているものもある。

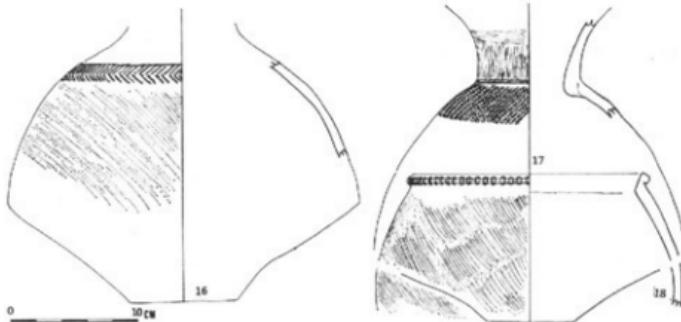
高杯（拓191）1片のみであるが、脚の下端に来て段を成して広がる菊川式土器に特徴的な高杯の脚の部分である。

台付甕（拓93、図18）台付甕の胴部上半分である。口縁にキザミ目を施し、器面全面に細い刷毛目を施している。

鉢（拓192）胴部上半分に細い刷毛目が施されている。口縁はやや外反氣味であり、あるいは片口形を成す土器かとも思えるがはっきりしない。

#### 土器の編年的位置について

第1群土器は極く少量であり、共に壺形土器であって甕形土器は含まれていない。中期の初頭



第15図 土器実測図

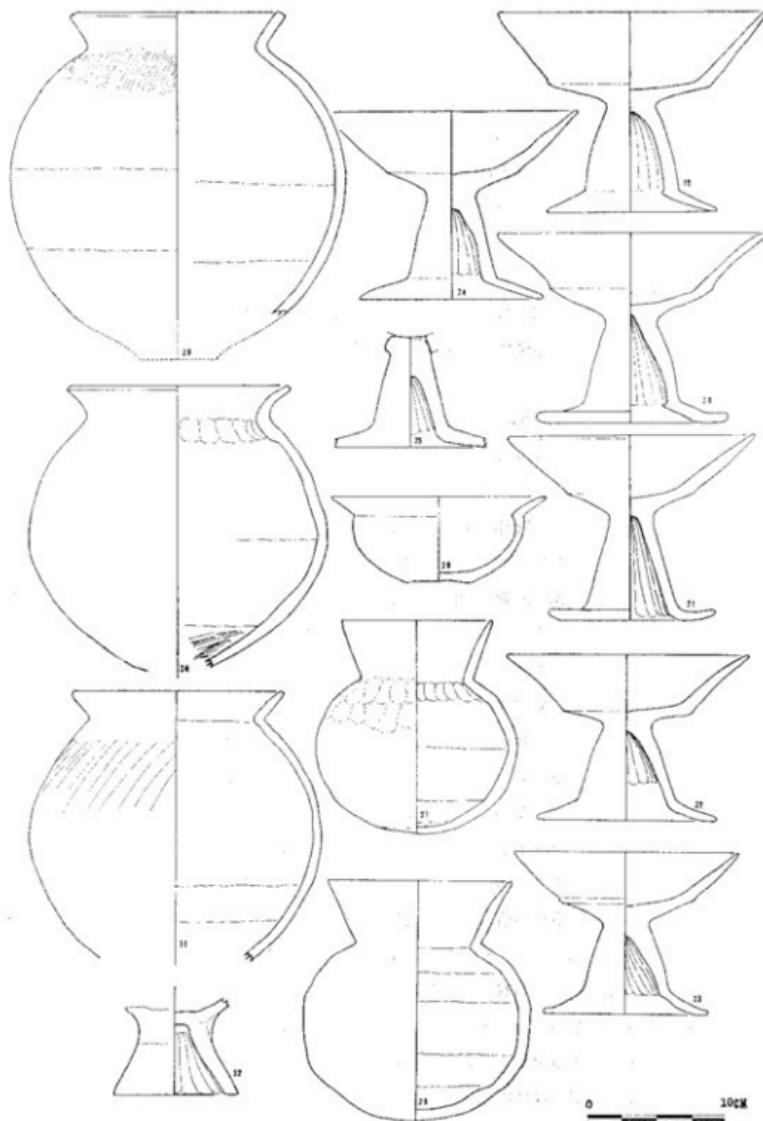
に編年的位置の求められる土器である。遠賀川式土器の分布範囲における中期の弥生式土器が櫛目文を持って始まるのに対し、それ以東では各地域で特異な弥生式土器が始まる。明確な概念規定をされているわけではないが「初期弥生式土器」と呼ばれている一群の土器がそれである。第1群とした土器もそれに含まれるものであり、この地域の弥生中期初頭に位置付けられている。拓161・162は条痕文土器であり、尾張で朝日式土器（田中1956）と呼ばれる土器あるいはこの地域で続水神平式土器（久永1956）、水神平Ⅱ式（紅村1963）等の名で呼ばれる土器に連なるものである。東側の地域では駿河の丸子式土器（杉原1962）洪沢遺跡の上器（小野1962）に関連を持つものであり、さらには関東地方の三ヶ木式土器（神沢1963）あるいは小田原市諏訪の前遺跡出土の土器（杉山1971）、秦野市同明遺跡の土器等に深い関連を持つものである。拓165に示した土器は従来この地域でこれほど明確な磨り消縄文を持った土器は確認されておらず注意しなければならないが、先に記した諸遺跡においては少量ずつはあるが磨り消縄文のある土器が伴っておりこの時期に特徴的な存在という事ができる。又この期のものには遠賀川式土器に良く似た土器が出土するが、櫛目文が施される事によって遠賀川式土器とは区別される。

第2群土器、小破片のみであり、明確ではないが、弥生後期の前半の土器が多い。拓178の如く扇状文を施したものは伊場式土器（鶴口他1953、向坂他1971）に特徴的である。拓186～188、図16・17に示した疑似縄文を持った土器は菊川式土器（久永1956）に特徴的である。拓191は小破片ではあるが菊川式土器に特徴的な高杯の脚である。菊川式土器は遠江地方の天竜川の東側に分布圏を持ち太田川、菊川流域に多く出土する土器であり、菊川町白岩遺跡（田辺1972）、赤谷遺跡（北川1954）、袋井市徳光遺跡（大谷、平野1968）、鶴松遺跡等に良好な資料が出土している。又磐田市二之宮連福寺貝塚、一本松遺跡等にも良好な資料が出土しているが未整理のため実態が明らかでない。天竜川の西側では出土例が少く従来ほとんど知られていなかったが、伊場遺跡の最近の調査において若干出土しており（伊場遺跡調査団1972）伊場式土器との平行関係が考えられそうである。又伊場式土器を出土する引佐、岡の平遺跡には菊川式土器は全く出土しておらず、分布が天竜川をわずかに越える程度である事を示している。

### 古墳時代の遺物

A7区C層より土師器の壺、甕、高杯、塊等14個体分が一括して出土した。出土状態については先に述べたとおりであり、これを一括資料とし同一時期を示すものと考える事が可能である。

高杯（図19～25）7個体分である。25の如く杯部の復元が不可能なものがあり、図上の復元もできていないが、破片から推定し、他のものとの間に大差はないと思われる。杯部は途中で稜を成して折れ、外反あるいは直口する口縁を持っている。杯部の口径の大きなものと、比較的小さなものとの二者があるが、両者の差は顕然としたものではない。胴部は比較的大く、中央がややふくらみ、下部で稜を成して外に広がっているものが多いが、21の土器のように、中央部でのふくらみを欠いているものもある。脚の内側には指頭あるいは籠による整形の痕がある。杯と脚と



第16図 土器実測図

の接合部分は坏部が突起部を持ち脚部に接合するものと、脚部が突起を持ち坏部に接合するものとの両者があり、量的にはほぼ同じくらいの比率である。

#### 壺 (29、30、31)

三者共に底部を欠いている。出土した資料の中に底部破片が含まれており、29の土器の破片と思われるがはっきりしない。直口あるいはやや外反する短い口縁を持ち胴部の強く張った器形を程し、最大径は胴中央部にある。内側には輪積成形の痕を残している。29の土器は細く観察すると外側にも輪積痕を残している。31は肩部に部分的に縱の沈線を施しており、弥生式土器以来の肩部文様の残影を見る事ができよう。

#### 壺 (27、28)

直口する口縁を持ち胴部の強く張った所謂小型丸底壺である。最大径は胴中央にある。内側は輪積整形のあとが著しく器全体にやや角ばった様子がみえる。

#### 壺 (26)

深さが口径の1/5弱であり、底部は上げ底である。頸部でややくびれ、口縁部は直口して外側に開いている。胎土は荒く、焼成はもろい。

#### 台付壺 (32)

保存が悪く口縁部、胴部及び脚部が接合できないので、脚部のみを図示した。口縁は外側に直口し、口唇部にはキザミ目を施す事なく、胴部は張り気味である。脚は高さの割りに太く、器壁も厚手に作られている。脚の内側に指頭によると思われる鑿形の痕が見える。脚と壺の接合部分は粘土をはって補強しているが、粘土のつぎ目はそれ程整しいものではない。

#### 土師器の編年的位置について

遠江地方において土師器の研究は遅れており、その編年についても纏まったものは公表されていない。その主たる原因は古墳時代の集落址の調査がほとんどおこなわれておらず、資料が量的にもまとまったものが少い事であろう。そうした意味では器種に不足があるが、ほぼ一括資料と考えられる見性寺貝塚の土器は優れた資料と言えよう。

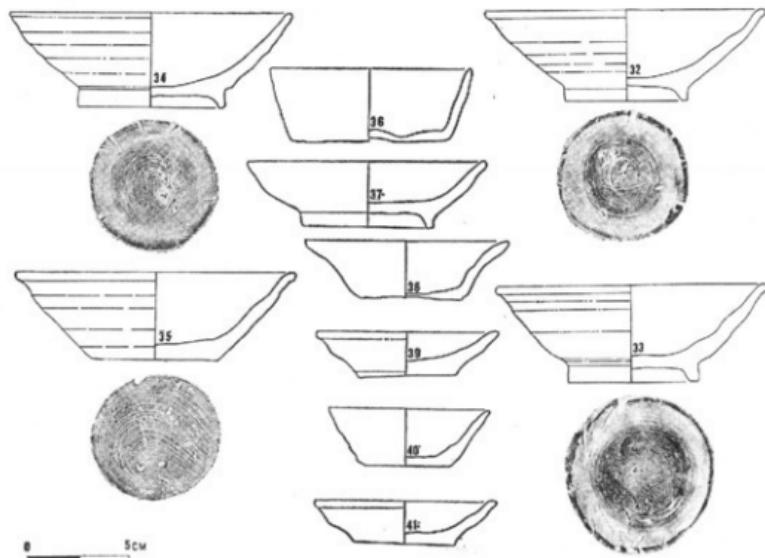
遠江地方において見性寺貝塚出土の土器と対比し得る資料は数少く、今の所森町片瀬遺跡出土の土器及び浜松市伊場遺跡における土器を挙げ得るのみである。さらに駿河において器形、及び組合せの点からも類似した資料が清水市石川遺跡（平野1965・望月1968）あるいは駿東郡御池遺跡（大塚1972）において出土している。これらはいずれも須恵器を伴っておらず、この地方において須恵器を伴出する最古の土師器と考えられる宮ノ腰I式土器（増井、堀田1964）とも多少異り、須恵器の普及する以前の土器である事が知られる。宮ノ腰I式土器に類似する土器は最近の伊場遺跡の調査において多数出土しており、その特徴がしだいに明確になって来ている。それによれば見性寺貝塚出土土器とは特に高坏に見られるようにかなりの変化を示しているが、特に注意されるのは器形の組合せの変化であり台付壺及び小型丸底壺の欠落が注意される。台付壺の欠落は煮炊きする場所が炉からかまどへという住居址の構造の変化と密接に対応しての事と考えら

れる。伊場遺跡の調査において遠江における第Ⅰ型式の須恵器を出土する住居址にはかまどが設置されており、それ以前のものは灰である事が確認されている（遠考研1971）

見性寺貝塚出土の土器を特に器形の変化を良く示すと思われる高杯について関東地方の土器に比較してみると、脚に比べて大きな杯部を持ち、杯の底部と口縁部の間に稜がある事、あるいは高く、やや内湾した脚を持つ事等一見してこれらの土器が関東地方の和泉式土器に類似している事に気がつく。さらに器形の組合せの点からも小型の丸底壺（壺）及び台付の壺を持つ事等和泉Ⅰ式土器の組合せ（玉口1962）ともほぼ一致している。とすると、これに後続すると考えられる宮の腰Ⅰ式土器が第Ⅰ型式の須恵器を伴い和泉式の新しい部分（和泉Ⅱ式）に並行すると考えられている事と矛盾しない。又愛知県高橋遺跡（田端1972）においても宮の腰Ⅰ式土器に類似する土器が出土しており、やはり、第Ⅰ型式の須恵器を伴出している。以上述べたように見性寺貝塚出土の土器はこの地方における須恵器出現の直前の時期のものであり、関東地方の和泉Ⅰ式土器に並行するものであろう。

### 奈良、平安時代及びそれ以後の遺物

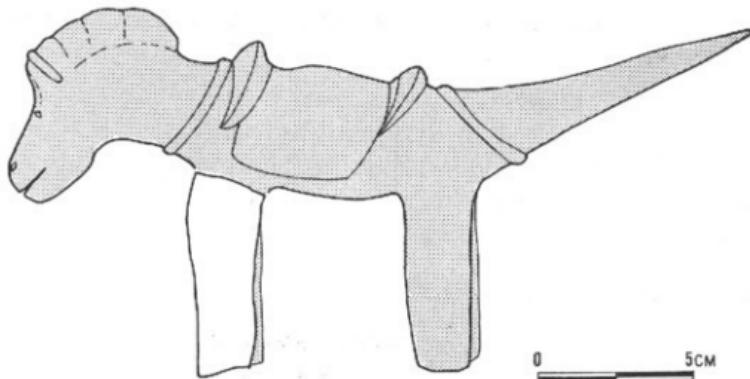
先にも述べたように貝層、貝層上の各層に奈良時代から近世に至る遺物が混在している。その大半は「カワラケ」の破片であったが、中に奈良・平安時代の土器及び瓦が少量含まれていた。第17図にその一部を示した。又古墳時代の須恵器片が含まれていたが、ここには図示しなかった



第17図 土器実測図

## 土器

第Ⅰ群土器（図36）口縁直口し、比較的大きな平底を持った壺である。底部はヘラ切りである。かつて遠江考古学研究会の手によって調査された湖西町東笠子古窯址群中の第Ⅲ地点と呼んだ所にこの種の土器を焼き台として使用している窯があった。奈良時代の末期に考えられるものである。



第18図 陶馬実測（概念）図

第2群土器（図32～35）D01区の移動された貝層中より出土したもので、出土状態は図版Ⅲ下段に示した。肩部に多少丸味を持つが、口縁がやや外反する壺である。34は口縁の外反する度合が少い。底部は32を除いて糸条切り底であり、その上に内側を削り取ったような形になる特徴的な高台を付けている。35は高台がない。この種の土器は浜北市吉名古窯に良好な資料が出土している。又浜松市伊場遺跡ではこの種の土器に「延長2年」（924年）の年紀のある木衝が伴出しており、（遠江考古学研究会1972）この土器の大凡その年代を知る事ができる。又33はこれらより多少古く考へても良いかも知れないが、ここに含めておく。

## 陶馬

左の前足の部分のみである。焼成は良好で、全体に灰色を呈している。遠江地方でも何例かの出土が知られている（山村・1966）が、それらのうち大半は奈良時代のものである。鞍を置き飾った馬とそうでないものがある。木貝塚出土のものが、いずれに属するかについては部分のみの出土であり、不明である。最近、浜松市伊場遺跡の調査の際、西部地区大溝と調査団が呼んでいる構造遺構の奈良時代の層から幾点かの陶馬が出土している。18図の点で塗りつぶした部分はそのうちの1点の実測図を借用した。資料の使用を快諾された伊場遺跡調査団の諸兄に感謝する。

## 第六章 見性寺貝塚出土の動物遺存体

### 1

見性寺貝塚出土の動物遺存体には、別表にも示したように、軟体動物・斧足類1種、脊椎動物で魚類1種、鳥類1種、哺乳類4種があり、それにヒトおよびウマがあった。ヒトは、その場所が現在寺域になっているという点で、またウマは縄文期のものとするには種々問題があるので改めて検討したいと考えている。出土した骨は、そのすべてを合せても大形のイチゴ箱3個分弱であり、多くの骨は破碎され、幾つかは同定が困難なものも含まれていた。以下、出土した動物骨の概要を記しておく。

### 2

#### 見性寺貝塚出土脊椎動物遺存体種名表

##### I 軟体動物 Mollusca

###### 斧足類 Pelecypoda

ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime

##### II 脊椎動物 Vertebrata

###### a. 魚類 Pisces

1. クロダイ *Sparus longispinis* (Temminck & schlegel)

###### b. 鳥類 Aves

1. 種名不詳種 sp. indet.

###### c. 哺乳類 Mammalia

1. イノシシ *Sus scrofa leucomystax* (Temminck & schlegel)

2. ニホンジカ *Cervus nippon nippon* Temminck

3. ニホンイヌ *Canis familiaris* var. *japonicus* Temminck

4. バンドウイルカ *Tursiops truncatus* (Montague)

5. イルカ科の一種 *Delphinidea* gen. et sp. indet.

以上の他にヒトとウマの遺骸がみられたが縄文期のものであるかどうか、なお検討する必要があるかと思われる。

### 3

次に上記遺存骨の性状について簡単に記載しておきたい。

## I 軟体動物

ヤマトシジミ一種が発見されたのみであった。ヤマトシジミの殻形には大小のものが含まれ、大形のものでは、殻長が45.0mmに達したが、これは量的に少なく、35.0mm前後のものが最も多かったようである。

## II 脊椎動物

### a. 魚類骨について

クロダイ 右側歯骨1 右側前上顎骨片1 本遺跡より認められた魚類骨はこの2片のみであった。

### b. 鳥類について

種名不詳の骨片1 肢骨中間部と考えられる骨片である。破片に過ぎないので種名の確認は不可能である。

### c. 哺乳類について

#### イノシシ、ニホンジカ

両種とも本貝塚遺存骨では主体を占めるものであるが、必ずしも同等の捕獲量をみていたわけではなく、したがって出土遺存骨には量的な差異を認めることができた。その出土状態は別表に示しておいた。

本遺跡においては、西貝塚にみられたような多量の歯牙は採集されていない。そのため歯牙による両種の量的な差を検討するというわけにはいかないのであるが、まず、ニホンジカの歯牙についてみると、右P<sub>4</sub>、(M<sub>1</sub>、2)は、咬耗著しく、左P<sub>4</sub>、M<sub>2</sub>は咬耗軽度であった。以上のこととは少くとも2個体分あるという予想を可能にさせる。次にイノシシをみると、右I<sub>2</sub>、左Cのみの出土なので個体数の検討を差しひかえざるをえない。尚、この左Cは雌のものであった。

そこで肢骨において両者を量的にみようと思うのだが、シカでは比較的數量の多い距骨、脛骨イノシシでは脛骨または腓骨でみるとことになる。まずシカであるが、距骨を大別すると「大」左1、右2、「中」左3、右2、「小」右1となる。よって距骨からは6個体以上のものを予想する。次に脛骨の検討であるが、左7、右6で脛骨からは7個体以上の予想が可能となった。さらに上腕骨についても検討するならば、遠位端の左（大）1、同左（小）2、同右（中）1、右（最初）中間破片1というように5個体を予想させる。以上のことで、最大数を脛骨にみて、シカは、7個体以上の出土である。

一方、イノシシは脛骨右中間部2、腓骨右遠位端2、より2個体以上の予想を可能ならしめたにすぎなかった。

尚、シカに関連して角のことであるが、その出土状態は表面にもみられるようにあまり多いものではない。断片を合わせて14個、そのうち落角と判断できるもの3個、人為的に切断したと判断できるもの2個であった。

このほかに中手骨を磨いたものが一例みられた。

遺存骨出土量表

- 魚類  
クロダイ r 頭骨:1、r 前頭骨片:1
- 鳥類 破片:1
- 哺乳類  
イヌ r (P<sub>3+4</sub>) rc、下顎骨片r-1; l-1・頸椎骨:1・大脛骨(遠位端):1

ニホンジカとイノシシ

1. 齒牙 ( ) ;顎骨

	r	l
ニホンジカ	P <sub>4+</sub> (M <sub>1+2</sub> )	P <sub>4+</sub> M <sub>2</sub>
イノシシ	I <sub>2</sub>	♀G

2. 肢骨 a=切歯角 b=角部 遠=遠位部・中=中間部・近=近位端

角	第2 頸椎	肩甲骨	上腕骨		後腕骨		尺骨		掌骨		大腿骨		胫骨		腓骨		距骨		脛骨		中手骨		中足骨		基節骨		中節骨		跗	
			a	b	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l
			ニホンジカ	2	3	2	1	2	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	2	1	2	2	2	2	5	4	5	7	8	2
イノシシ					1	1	1	1													2		1		1	2	3		15	

3. その他の骨

種類	出土した骨
ニホンジカ	頭頂骨片-1、同竪片2、下顎骨r-1、l-2(吻端)、同竪片5、下顎核骨片r-1(開節突起)
イノシシ	顎骨片-1

バンドウイルカ 齒1

イルカ類 椎骨1 尺骨片?

ヒト 大腸骨r(中~小脛子)1.歯-1 {r 上腕骨(中~下) 尺骨(近) {r 上腕骨(遠位端欠) 尺骨(遠位端欠) 尺骨r(中間部)

おそらく三体分の遺骸であろう。

ウマ 前頭骨片、歯牙r 1; l 2 l: 1 1 1 M<sup>2</sup> 破片-3

上腕骨l(中間部)、桡骨l(近) 肘骨r(遠) l(遠)、中足骨(遠)

○ 破片 人骨片-29、歯骨片、頭骨片

近位端r 1  
" " l 1  
脛骨-2、中足骨  
遠位端 1  
破片 8

総残骨片数 473

バンドウイルカ 頭 1

イルカ科の一種 椎骨 1 尺骨片? 1

4

以上、見性寺貝塚出土の動物遺存体についてその概要をのべたが、一、二特に注目される点を次に記しておきたい。

まず、貝類については、ヤマトシジミ唯一種のみが知られただけであった。これは、かつて調査された西貝塚の最上層晩期に属する堆積層においても観取されたことであって（そこでは99.9%がヤマトシジミであって、0.1%のイソシジミがあった）、後期末頃から既にみられてくる傾向であるように思う。

鳥・魚骨は、その数がごく少いものであった。小形でかつ破損し易い骨でもあるので、遺跡における骨類の保存が充分でなかったかも知れないのであるが、ニホンジカ、イノシシの骨の出土量の割には、やはり魚、鳥類のそれは少ないとみなければならないであろう。

哺乳類では、若干のイスとイルカ類の骨を除くと、ニホンジカ、イノシシの骨のみであった。狩猟対象としてはほとんどシカとイノシシに陸獣は限られたようである。

このように、見性寺貝塚にみる捕獲動物は、脊椎動物にあっては、シカ、イノシシに集中する様相がみられた。このことは、晩期における一つの特徴ではないかと思われ、同じような傾向のあることが、関東地方の千葉県下の遺跡でも認められている。縄文晩期の狩猟活動の様相を理解するための重要な特徴といわねばならないであろう。

（早稲田大学考古学研究室 金子浩昌 鈴木洋子）



D1区 敷石遺構

## 第七章 見性寺貝塚人骨群所見概説

——特に風習によると思われる抜歯のある下顎骨、および人工の  
疑いのある傷痕を有する大腿骨について——

### はじめに

筆者の一人小片保は、縄文早期、前期人（以下縄文早前期人）（早期初頭に1時期を考えている学者もあるが）は「きゃしゃ」で、縄文中期・後期・晩期人（以下縄文早後晩期人）は「がんじょう」であることをしばしばのべ、その原因は生活環境の変化によるものであろうと推論した。ここに発掘にされた関係諸氏により、見性寺貝塚人骨群の調査を許され、これらについて概説し、興味深い所見についてのべる機会を得たことを深く感謝するしたいである。

### 1. 人骨の一般所見

これらは散乱人骨で、ヒト以外の動物骨とともに発見されたものであって、歴史時代に入つてから工事のために発掘され、移動されて埋められていたものを再び発掘したとのことで、従つてこれら人骨の最初の埋葬様式その他の詳しいことはわからない。

人骨群のほとんどすべてが破損しており、欠損している部分も多く、詳しい計測や観察はできないが、骨そのものの保存状態は良好で、堅く、これ以上の崩壊は当分起らないようである。頭蓋骨、顔面骨の一部と、体肢骨およびわずかな脛骨から成り立っている1群である。

頭蓋骨のうち、後頭骨破片が3個体分ある。そのうち2個体は Inion の突出が強く、残る1個体は Inion の突出がほとんどみられず平滑で、前2者は男性骨、後者は女性骨を思わせる。多くの頭蓋骨の破片は厚く、「がんじょう」である。顔面骨のうち、下顎骨の破損したものが2個体ないし3個体ある。1個体は左筋突起の部分が長大、その先端は鋭である。次の個体はオトガイ高が小さい。これら2個体が同一個体であるかないかは別として、縄文早前人よりも大きい値をとっていると思われる。次の個体は下顎骨のほとんど右半だけのものである。全体として小型で、咬筋粗面は比較的平滑で、可能な部分の計測値も女性骨を思わせる。「ゆりいす」型で、下顎隆起はみられない。第3大臼歯が残っているが、咬耗度は Martin の第1度で、咬合面から隣接面にかけてカリエス（C 3）がみられる。これは成人期のものであり、そのうちの壮年期のものと推定した。

脛骨としては、肋骨の破片がある。

体肢骨のうちで上肢骨では、鎖骨が2個体分あり、1個体はかなり強大で、他個体は弱小である。上腕骨は大小2個体分あるがよくわからない。橈骨は3個体あり、そのうち2個体は強大で

あるが、1個体は弱小である。尺骨は2個体分あり、ともに強大である。下肢骨では、寛骨の破片のなかには確実に成人期の女性骨がある。大腿骨の破片から確実に7個体分あり、そのうち1個体は未成人期のものらしい。残る6個体のうち、近位骨幹部の残っているものがあり、上骨幹横断示数から広型であり、この部分が前後に扁平であることを示している。また軽度の第3転子を形成しているものもある。骨幹中央部では、強大なものは粗縁の発達が良好で、横断面はいちぢく形をなしているものが多く、これは縄文人に多く見られる柱状大腿骨である。中央周は縄文中後晩期人にみられるように大きい値を示している。脛骨は破片ではあるが、強大なもの、弱小なものあり、骨幹周は全体として、縄文中後晩期人としてはあまり大きくなはない。骨幹中央横断面は、HrdličkaのⅠ型、および後面に1稜を作り、Ⅳ型のものもある。脛示歎から、中脛か厚脛に属しており、扁平脛骨とはいえない。腓骨は2個体分あり、1個体は強大、他個体は弱小である。距骨も2個体分あり、ともにこれら2個体は蹲踞の風習のあったことを示す証拠がある。

以上のように大腿骨の個体数から、成人期のもの6個体分、未成人期のもの1個体分があることがわかる。性別はよくわからないが、下頸骨の1個体は女性骨らしく、寛骨の1個体分の女性骨とが同一個体かどうかわからない。他骨がせいぜい2～3個体なのに、大腿骨の個体数が最も多い理由はよくわからない。これらは、例外は別として、縄文早前期人よりむしろ縄文中後晩期人の特徴を多くもっていると考えられる。

## 2. 風習によると思われる抜歯のある下頸骨について（図版 XI）

前述の下頸骨の右半のものに風習による抜歯と思われる部位がみられる。右半のみで不明な点は多いが、右第1、第2切歯は以前に抜去され、歯槽は閉鎖し、これらの歯槽部は唇舌方向に扁平となり、上面は1稜を作っている。この状態がわずかに左側にのびているようなので、たぶん、少くとも左第1切歯も抜去されていたのではないかという疑いが強い。犬歯より第1大臼歯までは、生前脱落したものか、死後脱落したものか不明である。第2大臼歯は生前疾患により脱落したものであろう。

## 3. 人工の疑いのある傷痕を有する大腿骨について（図版 XII）

右大腿骨の破損しているもののうち、近位骨端部が欠損し、それでも遠位骨端部の一部分が残っている長さ約330mmのものに、主として骨幹部に人工の疑いのある傷痕を有するものが見出された。主として上半部の後面の内側面に多く、外側面や前面にもみられるが、辺縁の鋭な浅い溝が多くみられる。内側面のものは比較的明確で、その明確なものは約7条グループあり、詳しく見ると1条は方向を少し変えた数本の浅溝によって構成され、長さは約12mmから3mmのものが最も多い。前面から外側面のものは近位部より遠位部に傾斜しているものがあり、これらの条痕が階段状になって連なっているものもあり、これらはより浅く不明瞭である。これらすべての傷痕はかなり鋭利な小形の利器によって連続的に切痕がつけられた疑いがある。これらはたぶん醫

齒類の「かじりあと」ではないと思うが、あるいは他の原因を考える必要があるかも知れない。

比較として他の個体の右大腿骨骨幹に露齒類の「かじりあと」と思われる例を図示した。

この成因については、もしこれが人工の傷痕とすれば、食入か、死体毀損などによる一種の宗教的意義を有するものかよくわからない。その他の理由もあるかも知れない。

以上のように、これらの人骨群は縄文晚期か弥生前期に属するものとして、多くの特徴を示しており、また、多くの問題を提起する重要な資料といえよう。

## 要 約

- 1) 見性寺貝塚人骨群は、縄文晚期か弥生前期に属するものである。
- 2) 個体数は成人期のもの少くとも6個体、未成人期のもの少くとも1個体あり、そのうちには女性骨と思われるものは1個体または2個体ある。
- 3) たぶん女性と思われる1個体の下頬骨に右第1および第2切歯、あるいは左第1切歯にも風習によると思われる抜歯がみられる。左側はほとんどないのでよくわからない。
- 4) 1個体の右大腿骨の骨幹部に、人工の疑いのある浅い短い条痕が多数見られる。
- 5) これらの人骨群は、縄文早前期人よりもむしろ縄文中後晩期人の特徴を多くもっていると考えられる。

新潟大学医学部第一解剖学教室

小片 保、関井 康雄

## 第八章 見性寺貝塚調査における二・三の問題

### I 今之浦周辺の遺跡群について

今之浦周辺の遺跡の分布は第19図に示したとおりである。縄文時代の遺跡は西から石原貝塚、見性寺貝塚、<sup>東</sup>西貝塚、東貝塚の4ヶ所を数えるが、東貝塚については確実な資料がないので今は別にしておく事にする。

これらの縄文時代の貝塚はほぼ海拔5mの等高線の通る所に位置している。石原貝塚のみはやや高い所にある。さらにこれより下、海拔3.5m～4mの所にかけて弥生時代から古墳時代さらには奈良時代に続く集落遺跡が存在している。西から御殿遺跡(D)、鎌田遺跡(G)鏡影遺跡(H)そしてニ之宮半島坊貝塚(E)がある。又台地の上には弥生時代後期の加茂東原遺跡があるが、ここでは縄文時代の遺跡のあり方について検討する事にし、弥生時代以後の集落については触れない事にする。

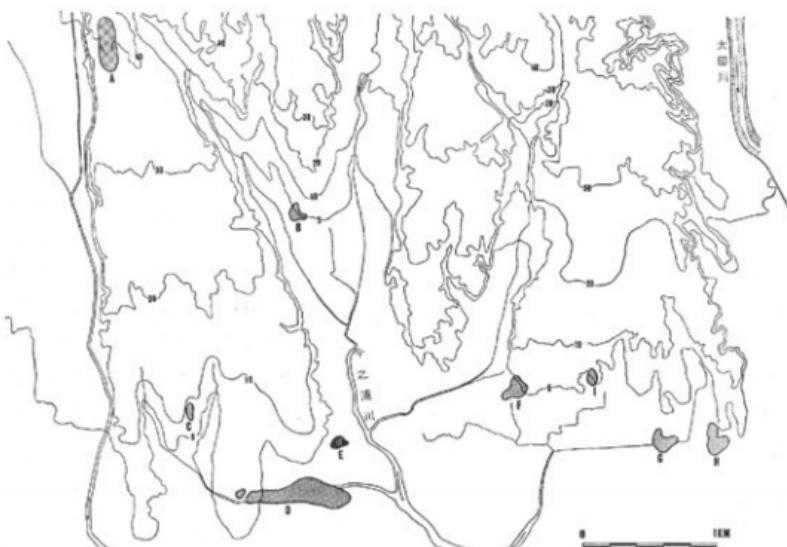
磐田原台地の上にも縄文前期から遺跡が形成され始め、中期までいくつかの遺跡が知られている。しかしこれらの遺跡は学術調査が実施されておらず内容は明らかでない。従って表面採集の資料等によって知るしかないが、出土する土器は縄文中期までに限られ、後期以後の土器を出土する遺跡はほとんどない。これに反し今之浦周辺の諸遺跡では西貝塚において縄文前期末から中期初頭の土器及び中期後半の土器が少量採集されているもの、及び石原貝塚で加曾利EⅡ式土器が2片採集されているのを除けば、他は全て後期前葉になって形成し始めると言って良い。西貝塚での前、中期の土器は遺跡形成の開始というにはあまりにも貧弱であり、本格的な遺跡の形成はやはり後期の堀ノ内式土器の段階になってからという事になろう。又西貝塚、見性寺貝塚では後期前葉に形成された遺跡がその後ほとんど絶える事なく縄文晚期終末の水神平式土器の段階まで続いている。遠江地方における諸貝塚の貝層形成期(遺跡の形成期)は大畠貝塚が大畠Ⅰ式土器(堀ノ内Ⅰ式土器)石原貝塚が堀ノ内Ⅰ式土器、西貝塚が堀ノ内Ⅰ式土器、鏡原が同じく堀ノ内Ⅰ式土器の段階というように縄文後期前葉である事は一致している。縄文中期までは貝塚が全く形成されず、後期に入って一齊に貝塚が形成されるという事は、この地域を取りまく自然条件が、貝塚の形成を可能にするように変化した事を示しているであろう。その変化の最大のもの

※ 東貝塚、西貝塚の東側、旧御厨村(現在磐田市御厨)に所在した貝塚であるが、早くから消滅したとされ、調査記録あるいは記載文献もなく正体は不明である。貝塚があったとされる場所は現在すでに宅地の中に入ってしまい確認できないでいたが最近「塵芥穴を掘った所、貝の出た場所があった」との事であり、おぼろげながら貝塚の位置を知る事が出来た。遺物等は不明であり、貝塚の年代規模等についてもはっきりしないが立地等より見て、縄文時代のものである事はほぼまちがいなかろう。

は縄文中期から後期にかけて徐々に始まったと考えられる海退現象によって（加藤1957）後期にはこの地域が砂泥性の貝類の棲息可能な状態が出現した事であり、又々の干溝の影響を強く受けた地形の成立した事であろう。又これらの貝塚の立地が磐田原台地の末端に位置し、石原貝塚がわずかに高い所に位置しているが他はほぼ海拔5メートルの線に近い所に位置している事が注意される。貝塚形成の時期及び立地の一一致はやはり遺跡を取りまく自然条件、恐らくその大半は海水汀線と強い関係がある事は充分予想し得る。

今之浦周辺の諸貝塚の形成されるのは縄文後期に入つてからである事を述べて来た。次にこれらの貝塚の形成された中心時期について検討を加えてみよう。

※ 石原貝塚は磐田原台地の先端部がすでに傾斜し始める所に位置した貝塚であり、岡本勇・市原寿文氏等による調査が行なわれた時には貝塚の主要部分である南側はすでに破壊されていた。遺跡の範囲は調査地点より南（台地の下り）に延びていた事が考えられるが、末端が未確認であり、詳しくは解らない。又遺跡の營まれた時期については岡本・市原両氏等による調査部分では後期前葉が主体であったが、中部部が破壊されている事を考えると少量ではあって他の時期の資料の存在は充分考慮して良いであろう。



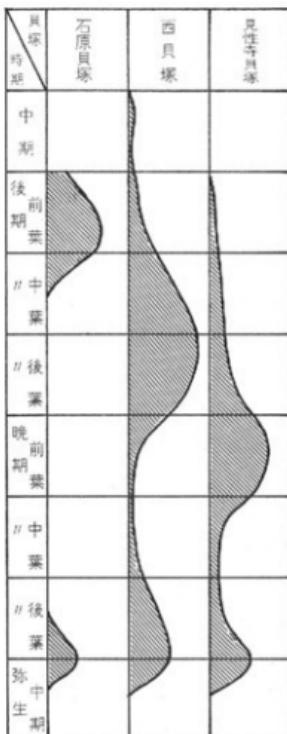
A 加茂東原遺跡      F 西貝塚  
 B 見性寺貝塚      G 磐田遺跡  
 C 石原貝塚      H 鶴影貝塚  
 D 二之宮遺跡      I 東貝塚  
 E 達福寺貝塚

第19図 見性寺貝塚周辺遺跡分布図

第20図に示したものは各貝塚における出土遺物の量を図表化したものである。詳細なデータを取り得たわけないので出土量を概念的に表わしてみた。遺物の出土量の大小がその遺跡における盛衰を示すものと考えて良いであろう。各貝塚共にピークになる時期を1回ずつ持っているが他はさほど多いものではない。さらにピークを示す時期は各遺跡によって少しずつずれている。すなわち後期初頭の石原貝塚、中葉後半を中心とする西貝塚、晚期前葉の見性寺貝塚というようになる。又石原貝塚を除き、西貝塚見性寺貝塚共にピークを示す時以外でも極く少量の資料が出土しほぼ絶える事なく遺跡は営まれていたようである。石原貝塚は先に述べたように調査以前に主要部分が破壊されており、それを考慮すれば後期初頭以外の土器が存在した可能性がある。これらの貝塚は第2図に示したように今之浦周辺に散在し、貝塚相互の距離は少く今之浦の中心部より径2~3キロ程の範囲の中に納まる距離である。これらの貝塚を営んだ人々の生活の舞台は当然今之浦とその南に広がる溝湖であり又背後に広がる磐田原台地であったろう。

岡山県南部における高橋護氏の研究（高橋1965、鎌木・高橋1965）によれば磯ノ森貝塚、彦崎貝塚、船元貝塚、船津原貝塚の4貝塚が相互に欠けた時期を補い合うような形で存在する事が指摘されており、これについて高橋氏は「独占的な狩猟、漁撈圈を持った」1つの集団の移動による結果であろうとし「このような相補的な関係で遺跡が把握される事は1つにはその定住性が極めて強固なもの」であった事を考えると共にそうした遺跡のあり方が縄文時代いっぱい続く事から縄文社会の「顕著でない発展」のしかた、言いかえれば停滞性という事について述べている。

こうした観点から今之浦周辺の貝塚群を見ると先に述べたように石原貝塚→西貝塚→見性寺貝塚と中心を占める遺跡が変化し、高橋氏の指摘にかなり近い事が知られる。従って生活の舞台を共有したこの貝塚群は各々が独立した集落を形成していたと考えるよりもむしろそれらが互に有機的に結び合って1つの集団を形成していたと考え事ができよう。これらの遺跡群を形成した集団によって占有されたであろう生活領域の大きさを考える手練りは今の所明確にはない。しかし遺跡間の距離及び広がりから考えて2キロから3キロ程の円によって示されるくらいの広がりをもったものになろう。1つの集団によって占有される生活領域の広さを径3キロ程の円によって示される広がりを持ったものになろうとする



第20図

考えは向坂鋼二氏によても既に示されている（向坂1968・1970）。

遠江における貝塚群に主に生産用具を中心にして他地域とは異った特性を認めこれを「沿岸漁業集落」と呼ぶ見解がある（市原1972）が「沿岸漁業集落」の内容が明確でないので早急な批判は差し控えたいが、気がついた事を1つ2つ述べておけば、遠江の貝塚群の特徴は釣針を欠き魚網及びヤスを中心とした漁法にあり、その確立するのは縄文後期中葉との事であるが、魚網及びヤスの組合せになる漁法ははたしてこの地域の特性というように理解できるだろうか。内湾砂泥性の貝塚の形成される地域ではむしろ一般的なものにも思える。又縄文後期中葉にそうした漁法が確立したと述べられているが、それはこの地域の遺跡群のあり方に基本的な変化をもたらしてはいない。やはり遠江の貝塚群はこの地域に特殊な漁法、立地等によって形成されたものではなく、縄文中期以後のこの地域における海退現象等により、貝塚形成が可能な自然条件が成立したことによるものであり、又そうした生活環境の好条件が縄文後・晚期におけるこの地域の遺跡数の増加に見られる現象を引き起したものであろう。

今之浦周辺における縄文時代の遺跡の終末の時期は水神平式土器の時期である。水神平式土器は見性寺貝塚、西貝塚で貝層を形成し、石原貝塚でもその存在が知られており、各遺跡ともその存在が前段階より顕著になるようである。この事は他の地域にも一般的に見られるようであり、水神平式土器を出土する遺跡の増加する事及び、從来からの歴代の大遺跡の一部に出土するに加えて単純な小遺跡の増加が目立っている。水神平式土器が縄文式土器か弥生式土器に属すかについては從来意見の相異が見られ、山内清男氏（山内1952。）紅村弘氏（紅村1963）等は弥生式土器と理解されているが、杉原莊介氏は縄文式土器と考えられているようである、筆者も水神平式土器が条痕土器の一派であり、縄文式土器の延長上にある事については既に述べているので、ここでは遺跡のあり方を中心にこの問題について述べてみようと思う。水神平式土器が縄文時代の歴代の大遺跡の最上層に位置する事については先に述べたが、今之浦周辺においても同様な傾向は見られている。又水神平式土器を出土する遺跡と弥生中期の遺跡とでは立地の上で差異があり遺跡上に連続性はない。この遺跡立地の差異は当然水稻耕作に関連したものと理解する事ができる。鍾影遺跡（2図H）は弥生中期初頭より後期に至る遺跡であり標高3.5メートル程の冲積地上に位置しているので、水稻耕作は十分考えられている。それに対し水神平式土器は見性寺貝塚、石原貝塚、西貝塚等共に台地の縁辺部に出土しており、農耕を考えさせるものはない。さらに八賀智氏によれば初期の農耕は地下水型のグライ土壌の発達した地域でおこなわれており、排水の不良な泥灰あるいは黒泥土壠でおこなわれるものではない（八賀1968・1971）。とすれば見性寺貝塚、石原貝塚等の前面は排水の不良な泥炭あるいは黒泥土壠であり、これらの地で農耕を営んでいる事は考えられない。従って水神平式土器に稟痕がある事がしばしば報ぜられるが、前期の弥生式土器である遠賀川式土器が伴出するのが一般的である事も考慮すれば、稟（穂）の存在そのものは当然知っていたであろうが、未だ水稻耕作をおこなう段階には達していなかったであろう。

水神平式土器を出土する遺跡を見ると縄文時代の遺跡の継続性という事が言い得る反面遺跡の連続したあり方が乱れ、遺跡の分布の上に混乱がおきている事がわかる。従ってこの時期を停滞性の強かった縄文社会が、西方からの弥生文化の流入による刺激に直面し、急激な変化を始める非常に流動性に富んだ時期だという事ができよう。以上述べてきたように水神平式土器の伝統性、水稻耕作の欠如及び遺跡の立地、継続性等より考えて水神平式土器及びそれに代表される文化（水神平式文化）を縄文式土器及び縄文文化の延長の中で把える事ができよう。今之浦周辺においても弥生文化の展開は弥生中期中葉になっての水稻耕作が本格化する頃になってからという事になろう。

## I 水神平式土器（の編年的位置）について

東海地方における縄文晩期終末の土器型式編年に関する研究は最近急速に進んで来ており、紅村弘、大庭義一、増子康真等の諸氏によって部分的に差異はあるもののその大綱は明らかにされて来たと言って良いであろう。しかしこれらの研究は尾張を中心とする東海地方西部のものであり、東海地方東部、あるいは関東地方の土器との関連についてはなお問題が残されている。その解決は東日本の弥生式土器の成立に直接的に関係を持つ事になると言って良いだろう。以下残された問題について不十分ではあるが日頃持っている考案を多少述べてみようと思う。

いうまでもなく東海地方における縄文晩期終末は条痕文土器の世界である。条痕文土器の研究がこの地域における縄文文化から弥生文化への移行に関する問題に直接的に結びつくであろう事は古く吉田富夫、杉原莊介、山内清男氏等によって気づかれた事であり、それ以後の研究にそうした視点は常に保たれてきたし又同時に西日本一円に広く分布するいわゆる突唇文土器群の一翼に位置する事への理解と共に、そうした研究が深められてきた。ここでは研究史を述べる事が目的ではないので細かく触れる事はしないが、戰後の東海地方の縄文晩期終末に関する研究は山内清男氏による吉胡貝塚の出土資料の検討が基準とされ、晩期新及び縄文直後の土器とされたものの実態の解明と編年での細分に大きな努力が注がれてきた。しかし条痕文土器は外見は形式的特徴が明瞭であるのに反し、あるいはそれ故にその細分は特徴が少く学術調査による資料が少い事も加えてその細分と検討は困難であった。

しかし豊川下流域の縄文晩期の諸遺跡の報告（杉原、外山1964）がされたのを初め、各地に分散している資料の公開（紅村1963）や一宮市史資料編の刊行（岩野1970）等相ついで資料が公表され、同時にそれらの資料を基にいくつかの論考が発表してきた。それらの中でも紅村弘氏によって各地域に散在している少量の資料が丹念に集められ、詳細な検討が加えられる事により土器の編年研究は急速に進んだと言える。

今、東海地方の縄文晩期後半から弥生中期前半への編年を紅村、増子両氏の研究に従って示すならば、細かい内容は省略するとして以下の如くである。

東 海 地 方	東北（亀ヶ岡式土器）
西ノ山式土器	大洞C <sub>2</sub> 式土器
五貫森式土器	大洞A式土器
馬貝塚式土器	
櫻王式土器（貝殻山式土器）	大洞A～A'式土器
水神平Ⅰ式土器	大洞A'式土器
水神平Ⅱ式土器（西志賀式土器）	
水神平Ⅲ式土器（朝日式土器）	

型式内容の細かい部分については多少の異同はあるが、大参、杉原、外山、久永氏等による研究も大要においては差異はないようである。特に縄文晚期後半から水神平式土器に至る変化及び水神平式土器の相対的位置については一致してきたが、他地域の土器との対比については未だ未解決の問題がある。

まずこれらの土器と東日本の土器との対比についてみれば、この地方の晩期の土器群に極く少量の亀ヶ岡式土器あるいはその影響を強く受けた土器が伴出している。それを手綱りに他地域との比較がされてきたが、単純な対比の資料、あるいは判出関係の明らかになったものが少く、土器の対比の仕方について意見の分れるところである。西の山式土器が大洞C<sub>2</sub>式土器に、そして五貫森式土器、馬貝塚式土器が大洞A式土器に対比し得る事については諸氏の意見はほぼ一致していると言って良い。

櫻王式土器については櫻王貝塚出土の浮線文土器の評価をめぐって意見の違いがあり増子氏は「非常に硬化した連続三角文を浮線でモチーフした」例であり、「新潟県鳥屋遺跡に近いものが認められ……鳥屋遺跡ではA'式との伴存が伝えられる」と述べ暗に大洞A'式に対比させているかに見える。しかし磯崎正彦氏によれば鳥屋式土器は大洞A式土器の新段階であり、A'式ではない（磯崎1969）し又馬目順一氏が指摘した如く（馬目1965）「大洞A'式土器が浮線文土器自身の中より誕生、形成するものでない」事を考慮すれば櫻王貝塚出土の浮線文土器を大洞A'式土器に対比する考えには無理がある。又浮線文土器が大洞A式土器に対比し得る事は埼玉県千葉遺跡の調査（蘭田1954）以来一般に認められている事であり、千葉県荒海貝塚（西村1961）、山武蛇山貝塚（鈴木1963）、神奈川県、杉田遺跡（杉原、戸沢1963）等の研究により追認されている。従って櫻王式土器は伴出した浮線網状文土器に従って大洞A式土器に並行する位置を与える事が出来る。

水神平式土器が亀ヶ岡式土器の何に対比し得るかについて明らかにしたものは少い。杉原、外山両氏は愛知県水神平遺跡の調査によって水神平式土器を大洞A'式土器に並行させている（杉原、外山1964）が、その論拠は明らかでない。又杉原、戸沢両氏も「五貫森式土器類似の小破片が杉田D類（大洞A式平行=著者）と関係ある事は合理性があるにしても水神平式土器類似の資

料については説明がむつかしい」（杉原、戸沢1963）と述べ論拠が明らかにされたわけではないが、暗に水神平式土器が大洞A'式土器に平行するであろう事を述べている。愛知県西志賀貝塚から出土した浮線による脇部に鰐巻の文様を持った深鉢形土器を紅村氏は「大洞A'式風の精製土器」（紅村1963）と述べ、この土器と同一の層から出土した水神平式土器の年代を決めようとしている。他に水神平式土器の編年的位置について明確に記されたものはないようである。

東海地方において亀ヶ岡式風の土器が水神平式土器に伴出した例を求めてみると、浮線文土器を出土した遺跡はかなり知られているにもかかわらず、判出関係が明らかにされているものは少い。従って再び西志賀貝塚出土の土器について触れば、この土器のモチーフがかなり変形しているとはいえ頭部文様帶と脇部文様帶の区別が明らかな事、さらにはこの文様が全て浮線文で描かれている事等この土器を大洞A'式に並行させるにはかなりの無理がある。同様の土器は愛知県二丹地貝塚（久永1966）及び岐阜県九合洞窟（大歩1956）等に出土しており、濃尾平野から飛騨地方にかけて特徴的な土器である事が理解される。又愛知県横平遺跡では水神平式土器に浮線文土器が伴存している。さらに静岡県嚴畑遺跡あるいは半場遺跡にも同様な現象が見られる。長野県菖蒲沢遺跡（根津他1973）あるいは城ノ平遺跡（宮沢他1973）等でも浮線文土器と貧弱ではあるが水神平式土器とが伴出している、従って水神平式土器は浮線文土器を媒介として大洞A式土器に並行する部分のある事が考えられる。

次に亀ヶ岡式土器と共に条痕文土器に伴出しているもう一つの重要な要素である遠賀川式土器を通じて、この問題を検討してみよう。

伊勢湾沿岸が遠賀川式土器が主体となる遺跡の分布の東限とされて、西志賀貝塚、貝殻山貝塚等で多量の土器が出土している事は周知の事である。紅村弘氏によれば濃尾平野における最初の遠賀川式土器は条痕文土器を伴出せず、貝殻山式土器の段階になって少量の条痕文土器（櫻王式水神平I式土器）が伴出し、つづいて西志賀式土器になると多量の条痕文土器（水神平II式土器）が伴う（紅村1958・1963）との事であり、杉原、岡本両氏による西志賀貝塚の調査においても同様の結果が得られている（杉原、岡本1961）。さらに久永春男氏等による二丹地貝塚の調査においても同様の結果が確認されているようである。

畿内における遠賀川式土器、すなわち畿内第I様式の土器は現在削り出し凸帯出現に先立つ段階（古）、削り出し突帯の出現した段階（中）、貼り付け突帯の出現した段階（新）の三つに分けられている（佐原1967）ので、それに従って濃尾平野の遠賀川式土器を見ると最も古いと考えられる二丹地I式土器は「中」の段階にあたる。この事はすでに佐原氏も指摘しているところであり、極く少量の条痕文土器を伴出する貝殻山式土器は、一部に削り出し凸帯の如きものも見られ判断が難しいが、「多条の籠描直線文」を施したものが多く「新」の段階に対比されるであろう。又貼り付突帯を多用する西志賀式土器も同様新の段階に対比される。従って伊勢湾沿岸の濃尾平野においては畿内第I様式の「中」の段階に遠賀川式土器が使用され、最初は単独で存在したもののが「新」の段階に入り、条痕文土器を伴出するようになる。又「新」の段階は判出する条

痕文土器及び遠賀川式土器自身の微細な変化によって二つに分けられる。古い部分の貝殻山式土器は櫻王式あるいは水神平Ⅰ式土器が伴い、後半の西志賀式土器に水神平Ⅱ式土器が伴うという事になる。

すでに何度も触れた事ではあるが、櫻王貝塚では条痕文土器は櫻王式土器、水神平Ⅰ式土器の両者が出土しているが、遠賀川式土器にも口縁部の外反度の少い壺と胸部破片ではあるが、貼付突帯を持った土器の両者があり、前者を貝殻山式土器に、後者を西志賀式土器に対応させている。従って櫻王式土器に古手の遠賀川式土器（貝殻山式土器）が伴い、水神平式土器に新しい遠賀川式土器（西志賀式土器）が伴出している事が知られる。この事に関して増子氏により「櫻王式土器は遠賀川式土器を伴出しないのではないか」とする疑問が出された（増子1965）が、愛知県西浦遺跡の調査により、櫻王式土器に浮線文土器の伴出する事が確認された（大参1972）。

静岡県山王遺跡では水神平Ⅰ式土器が多量に出土し、それに浮線網状文土器及び長野県の水Ⅰ式土器（永峰1969）が伴出している。1片ではあるが、遠賀川式土器の壺の口縁部破片が出土しており、それによれば口縁部の外反度の弱い事が注目され、貝殻山式土器に近いものではないかと思われる。さらに静岡県東部の駿東郡南一色遺跡（小野1970）及び賀茂郡佐原遺跡（小野1971）等において水神平式土器と遠賀川式土器の伴出が報ぜられている。又東京都伊豆新島田原遺跡においても多量の条痕文土器と遠賀川式土器が出土した事が知られている（杉原、大塚、小林1967）。又神奈川県同明遺跡<sup>※</sup>において遠賀川式土器を出土した小竪穴が発見され、それに口縁部に沈線による連続三角文を描いた深鉢形土器が伴出した。恐らく東関東地方の荒海式土器に並行するものであろう。とすれば、荒海式土器は少くとも一部は遠賀川式土器に対比し得る事になり、関東地方の弥生式土器の成立の問題に関し、大きな意味を持つことになろう。

天竜川流域では愛知県北設楽郡桜平遺跡で水神平式土器及び浮線文土器に伴って遠賀川式土器が出土した事が報ぜられている（久永1966）が、現地本郷高校に保管されている遺物の中には含まれておらず、詳細は不明である。さらに長野県下伊那郡林里遺跡において水神平式土器、水Ⅰ式土器等に伴って浮線網状文土器及び遠賀川式土器が出土している。（神村1968）。この資料が細分される可能性のある事が指摘されている（永峰、向坂1968）が判断の難しい所である。貼付突帯を持った壺の上に水神平式土器の壺がかぶせてあったという出土状態よりすれば、両者が併存していた事は明らかである。水神平式土器及び遠賀川式土器を出土した幾つかの遺跡を見てきたが、それらは図式的に表現すれば次ののような関係を考える事ができる。

※ 同明遺跡については、現在出土資料の整理がおこなわれているが、一部についてはすでに概要を報じてある。なおここに触れた遠賀川式土器については佐原真氏に御教示願った。感謝する。

皿ヶ岡式系土器（関東）	条痕文系土器	遠賀川式土器（伊勢湾）
(杉田Ⅲ式土器)	五貫森式土器	(元屋敷式土器)
大洞A式土器	馬貝塚式土器	貝殻山式土器
	慄王式土器	
	水神平Ⅰ式土器	西志賀式土器
大洞A'式（荒海式土器）	水神平Ⅱ式土器	
大洞A'式（三ヶ木式土器）	水神平Ⅲ式	(朝日式土器)

今まで見てきたように水神平Ⅲ式土器は西方の遠賀川式（西志賀式）土器を伴出し、東日本では大洞A式及びA'式土器の両方に対比し得る事になる。さらに大洞A'式土器をA'Ⅰ式、A'Ⅱ式と分け得る（馬目1965）とすれば水神平Ⅲ式土器に対比し得るのは大洞A'Ⅰ式土器である。従って遠賀川式土器も大洞A式土器に対比し得るもののみでなく、その最末は大洞A'Ⅱ式土器に対比させ得るという事になる。これに似た考えは関東地方の初期弥生式土器を舞台に工楽普通式によって述べられている（工楽1968）。それによれば、群馬県上久保遺跡（女方遺跡）、四十坂遺跡、千葉県荒海貝塚及び水神平式土器をほぼ平行する位置に置き、それに遠賀川式土器風のものが伴い、群馬県岩櫃山遺跡、南関東の須和田式及び新潟県六ノ瀬遺跡、狸山遺跡等のものをそれより時間的に後続する位置においている。荒海式土器が須和田式土器あるいは岩櫃山遺跡の土器より古く、それに遠賀川式風の土器が伴うとする考え方方は良いにしても、上久保遺跡の条痕文土器は水神平式土器ではなく、西関東の三ヶ木式土器（神沢1963）あるいは駿河の渋沢遺跡の土器（小野1962）さらに丸子式土器（杉原1962）に連なるものであり、それは遠江地方では水神平Ⅲ式土器に対比されるものである。水神平Ⅲ式土器は伊勢湾沿岸では畿内第Ⅰ様式の影響下にある節目文土器を伴出しており、これを遠賀川式土器に対比する事は難しい。又上久保遺跡の条痕文土器と良く似たものが神奈川県同明遺跡では磨り消縞文のある大型の壺と同一の小窪穴より出土しており、上久保遺跡の土器を岩櫃山遺跡の土器と分け得る根拠が分らない。又四十坂遺跡の土器も磨り消縞文のある土器を伴っており、やはりこれを荒海式土器と平行関係に置く事に疑問がある。水神平式土器と関東地方の弥生式土器との関係については稿を改めるつもりなのできこではこれ以上触れない事にするが、結論的に言えば、水神平Ⅲ式土器に平行するものは恐らく杉田Ⅲ式及び荒海式土器という事にならう。

## お わ り に

全国各地で起きているのと同様に遠江でも開発に伴う緊急発掘が急増し、それへの対応に追われて、自分達の自由な研究と、それに基づく調査をしている時間はほとんど無くなりかけている。遺跡の破壊に対し最大限の努力を投入してそれと共に取り組むと共に、その片方でそれに埋没してしまう事を避けて、地域での研究を進める意味で、遠江を中心に縄文晩期の研究を共通の問題にして少しずつ研究を続ける事を考え、水窪町向市場遺跡（植松、平野1965）、湖西町伊賀谷遺跡（向坂1970）、春野町里原遺跡、佐久間町半場遺跡等の調査及び資料の再整理等を実施して来た。見性寺貝塚の調査もそれら一連の調査の一部を成すものである。

見性寺貝塚は本文中にも述べたように後世の擾乱が激しく、当初期待したような成果は挙げ得なかったが、縄文晩期末の貝層の発見、土師器の一括出土資料等資料的にはかなり良好なものが出た。出土した資料の大半は細かに破碎された土器であり、整理、検討に大分時間がかかった。整理は島田商業高校の生徒諸君の応援を得て植松章八、平野吾郎が中心になって実施した。資料の検討にはいつもの事ながら浜松市立博物館向坂鋼二氏に種々教示をいただいた。又自然遺物は早稲田大学の金子浩昌・鈴木洋子。人骨は新高大学の小片保・関井康雄の諸氏に鑑定をお願いし、原稿をいただき本書に収録する事ができた。遠江考古学研究会の会員諸兄を始め、多くの人々に協力を得ながら本報告の執筆を担当させていただいたが、極めて不充分のものにしか成しえなかった。隔靴搔痒の感をいただかれた人も多い事と思う。力不足を痛感している。今後共、遠江地方における関連資料の整理と研究を進め、少しでも纏まったものを造る努力を続けたいと思う。最後に暑い夏の調査に参加してくれた遠江考古学研究会の諸氏及び各高校の生徒諸君の勞に対して深く感謝の意を表すと共に、磐田市立郷土館報告のシリーズに加えて発表の機会を与えていただいた磐田市教育委員会及び磐田市立郷土館の諸氏に深く感謝の意を表すしだいである。

## 調査参加者

### 遠江考古学研究会

青木美衡・青島芳明・植松章八・漆畠敏・川江秀孝・黒田勝久・芝田文雄・鈴木久雄・杉崎猛・  
傍島由美子・中西道行・尾藤院・平野吾郎・三浦茂昭・向坂鋼二・齊藤美恵子・松本正規

### 島田商業高校社会部

浅岡芳郎先生・稻葉葉子・佐野節子・沢本敏雄・松原久夫・増井いく代・大久保進・西田登志彦  
・堤坂茂子・杉村ふみえ・増田君子・八木道代・萩原孝子・岩堀静雄・山口正義・落合開広・西  
谷博・福地藤次・小澤明・伊藤省吾・友田由喜夫・飯田和夫・牧野恒男・福井龍之・竹中智子・  
浦住京子・佐野真知子・石川多津子・曾根千恵子

### 浜松女子商業高校

辻光子・田畠佐知子・大石揚子・小野田和代・松山伯子・小池好美・門奈京子・齊藤公子・本田  
裕子・松原幸代・森昌代・水谷忍

### 磐田南高校郷土研究部

### 磐田北高校郷土研究部

### 浜松市立高校郷土研究部



発掘作業 その2

## 参考文献

- 麻生 優 61 「西貝塚」  
" 62 「土器」「蜋塚遺跡—總括編」  
井口 審晴 70 「愛知県丹羽郡大口町西浦遺跡」「日本考古学年報18」  
池田 邦脩 54 「磐田市誌上」  
磯崎正彦・上原甲子郎 69 「亀ヶ岡文化の外殻層における終末期の土器型式」「石器時代9」  
市原 寿文 57 「遠江国磐田市西貝塚出土資料の再吟味」「静岡大学人文学部紀要」  
" 60 「清水天王山遺跡」  
" 62 「遠江石原貝塚の研究」  
" 72 「長者平遺跡発掘調査報告」「雄踏町誌—資料編五」  
福垣甲子男・平野吾郎 68 「静岡県淡間林遺跡（第二次）調査報告書」  
岩野 見司 70 「新編一宮市史資料編1」  
植松章八・平野吾郎 65 「静岡縣向市場遺跡出土の土器」「金鉢19」  
江崎 武 65 「所謂大地式土器の再検討」「いらのみや考古6」  
大谷純仁・平野吾郎 68 「袋井市篠光遺跡発掘調査概報」「東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書」  
大冢 初重 72 「御池遺跡出土の土器」「土師式土器集成本編」  
大參 義一 55 「愛知県大地遺跡」「古代学研究11号」  
" 56 「九合洞遺跡」  
" 72 「縄文式土器から弥生式土器へ」「名古屋大学文学部研究論集4」  
鶴田 茂弘 65 「縄文文化の発展と地域性—近畿」「日本の考古学」  
鷹本 勇 51 「静岡県小笠郡大畑遺跡」「日本考古学年報4」  
長田 実・向坂 銅二 60 「第三貝塚区域の発掘調査」「蜋塚遺跡—その第三次発掘調査」  
" 61 「第三貝塚区域の発掘調査」「蜋塚遺跡—その第四次発掘調査」  
小野 真一 62 「富士宮市沢沢遺跡出土の弥生土器」「駿豆考古6号」  
" 70 「駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」「駿豆考古10号」  
" 71 「佐原遺跡」「日本考古学年報24」  
鎌木 義昌・高橋 篤 65 「縄文文化の発展と地域性—瀬戸内」「日本の考古学」  
神村 透 68 「弥生文化の東漸とその発展」「長野県考古学会誌第5号」  
神沢 勇一 63 「神奈川県三ヶ木遺跡出土の弥生式土器」「考古学集刊2巻1号」  
北川 昇好 54 「河城中学校校庭遺跡」「大井川流域の文化」  
清野 謙次 25 「日本原人の研究」  
" 69 「遠江国磐田郡西貝塚村宇西貝塚の貝塚」「日本貝塚の研究」  
工業 普通 68 「北関東地方I」「「弥生式土器集成本編」」  
紅村 弘 56 「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」「古代学研究13」

- 紅村 弘 61 「篠東一篠東第2次・樺王・行明調査報告」  
〃 63 「東海の先史遺跡—總括編」
- 桜井 清彦・平野 吾郎 66 「愛知県設楽町神谷沢遺跡の調査」『史報77冊』
- 佐原 真 67 「山城における弥生式文化の成立」『史林50卷5号』
- 杉山 博久・鴻川 慶夫 71 「小田原市諏訪の前遺跡」
- 杉原 荘介・岡本 勇 61 「愛知県西志賀遺跡」『日本農耕文化の成生』
- 杉原 荘介 62 「駿河丸子及び佐渡出土の弥生式土器に就いて」『考古学集刊4冊』
- 杉原 荘介・戸沢 充則 63 「神奈川県杉田遺跡及び桂台遺跡の研究」『考古学集刊2卷1号』
- 杉原 荘介・外山 和夫 64 「豊川下流域における縄文時代晚期の貝塚」『考古学集刊2卷3号』
- 杉原 荘介・大坂 初重・小林 三郎 67 「東京都(新島)田原における縄文・弥生時代の遺跡」『考古学集刊3卷3号』
- 鈴木 公雄 63 「千葉県山武郡横芝町蛇山山武蛇山貝塚の晚期縄文土器に就いて」『史学36卷1号』
- 鈴木 久雄・平野 吾郎 69 「磐田郡賀茂東原遺跡の土器について」『遠江考古学研究3』
- 園田 労雄 54 「千鶴谷戸」
- 高橋 誠 65 「縄文時代における集落分布について」『考古学研究12卷1号』
- 田中 稔 56 「愛知県西春日井郡清州町松ノ木遺跡」『古代学研究14』
- 田辺 昭三 72 「白岩下流遺跡調査報告」
- 田端 勉 72 「高橋遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編』
- 谷本 銳次 72 「中ノ庄遺跡発掘調査報告」
- 谷沢 靖 61 「宮東1号貝塚」『刈谷市泉田貝塚群』  
〃 67 「本刈谷神社貝塚」
- 坪井 清足 56 「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」
- 外山 和夫 67 「西日本における縄文文化終末の時期」『物質文化9号』
- 遠江考古学研究会 71 「伊場遺跡の話」  
〃 71 「伊場遺跡第4次調査月報」
- 内藤 覧・市原 寿文 61 「第1貝塚南部区域の発掘調査」『根塚遺跡—その第四次発掘調査』
- 西村 正衛 61 「千葉県成田市荒海貝塚」『古代36号』
- 西村 正衛・馬目順一他 65 「関東における縄文式最後の貝塚」『科学院壳1965-10』
- 永峰 光一 69 「水遺跡の調査とその研究」『石器時代9号』
- 根津 清他 73 「菖蒲沢遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 八賀 晋 68 「古代における水田開発」『日本史研究96号』  
〃 71 「古代の農耕と土壤」『古代の日本』
- 猪口清之他 53 「伊場遺跡」
- 久永 春男 56 「各地域の弥生式土器—東海」『日本考古学講座4』  
〃 61 「牛牧遺跡」  
〃 63 「大穴遺跡」

- 久永 春男 66 「弥生文化の発展と地域性—東海」「日本の考古学」
- 〃 72 「伊川津貝塚」
- 平野 吾郎 71 「愛知県北設楽町麦田遺跡の調査」「古代54号」
- 〃 65 「飯田石川遺跡発掘調査概報」
- 堀田美桜男・増井 義己 64 「宮の腰遺跡」
- 増子 康真 65 「尾張平野における縄文晚期後半期上器の編年の研究」「古代学研究40」
- 〃 66 「雷貝塚の研究」「鳴鹿のあけぼの」
- 〃 71 「尾張・三河の弥生文化成立過程の問題点」「東日本弥生時代遺跡地名表」
- 宮沢恒之助 73 「城ノ平遺跡」「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・昭和47年度」
- 尚坂 鋼二 61 「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾」「第四紀研究2の1」
- 〃 68 「東海地方縄文後期末葉の時期」「遠江考古学研究1」
- 〃 68 「駿塚遺跡とその時代」「浜松市史上」
- 〃 70 「縄文時代郷土の生活調」「郷土史研究と考古学」
- 〃 71 「伊場遺跡第3次発掘調査概報」
- 〃 71 「半場遺跡と平沢遺跡」「佐久間町史上」
- 森 浩一・藤井 裕介 65 「岡崎縄文遺跡」
- 森 浩一徳 71 「シンポジウム弥生式文化研究の諸問題」「古代学研究61号」
- 山内 清男 52 「第1トレンチ」「吉胡貝塚」
- 山村 宏徳 66 「大沢・川尻古窯跡調査報告書」
- 吉田 富夫・紅村 弘 58 「名古屋市西志賀貝塚」
- 吉田 富夫・和田 英雄 71 「古沢町遺跡発掘調査報告書」
- 望月 差弘 68 「清水市石川遺跡発掘調査概報」「東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書」

図 版 I

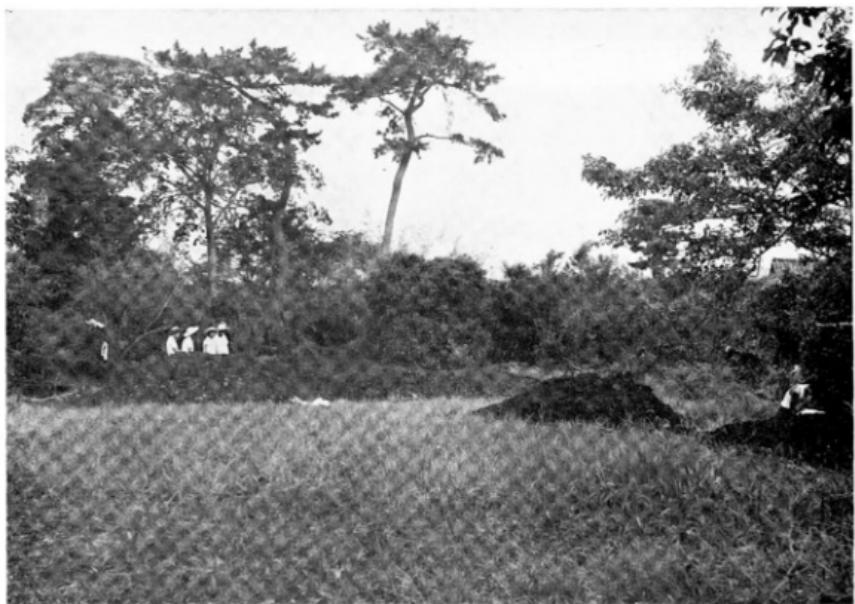


見性寺貝塚位置

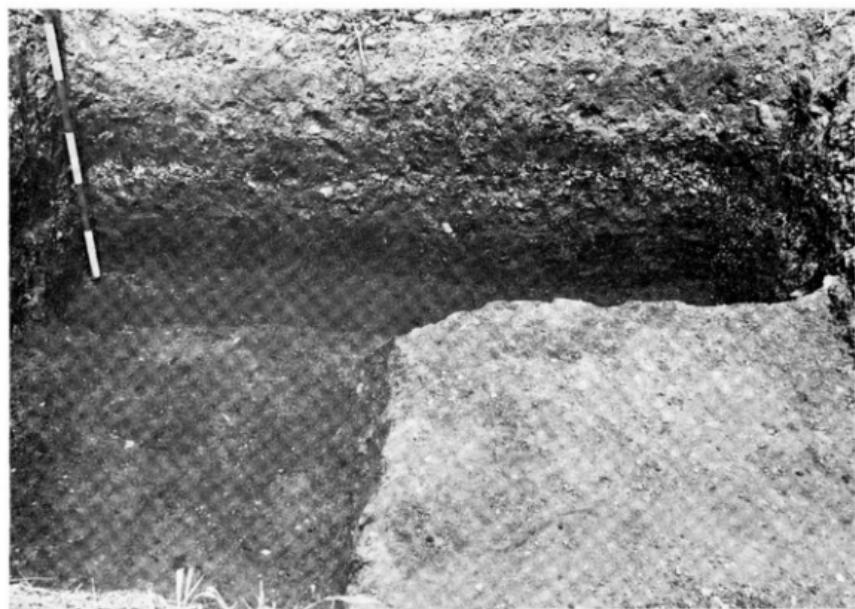


見性寺貝塚近影

図 版 II

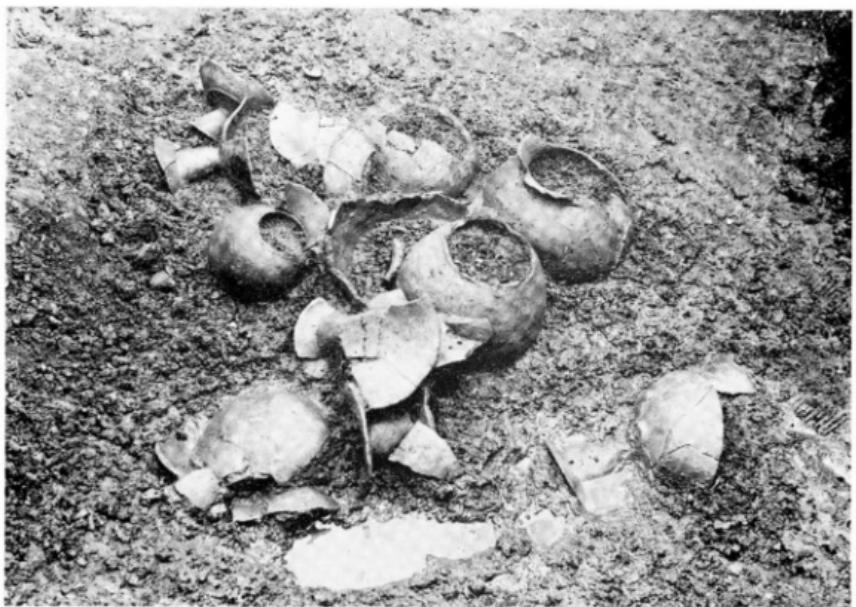


発掘の状態



発掘区断面

図 版 Ⅲ

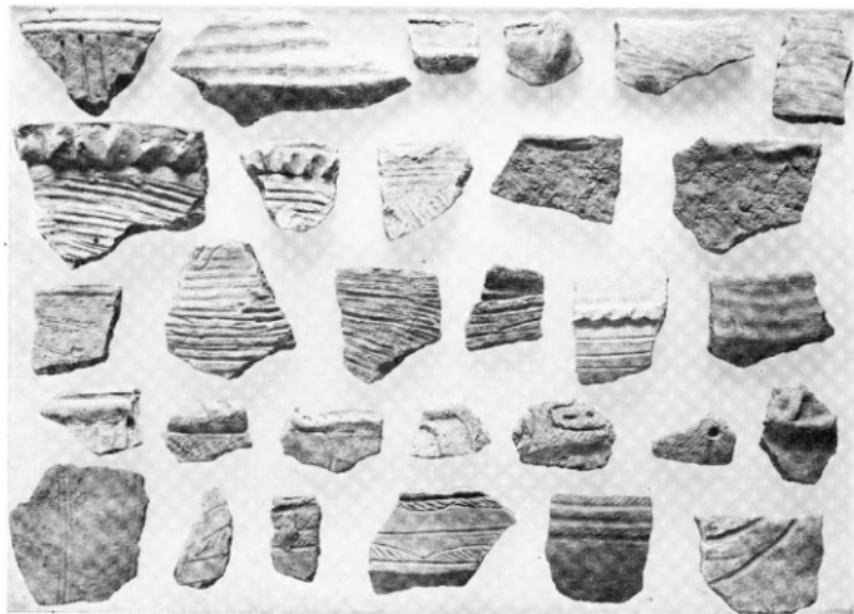


A7区 土器出土状態



D1区 土器出土状態

図版 IV

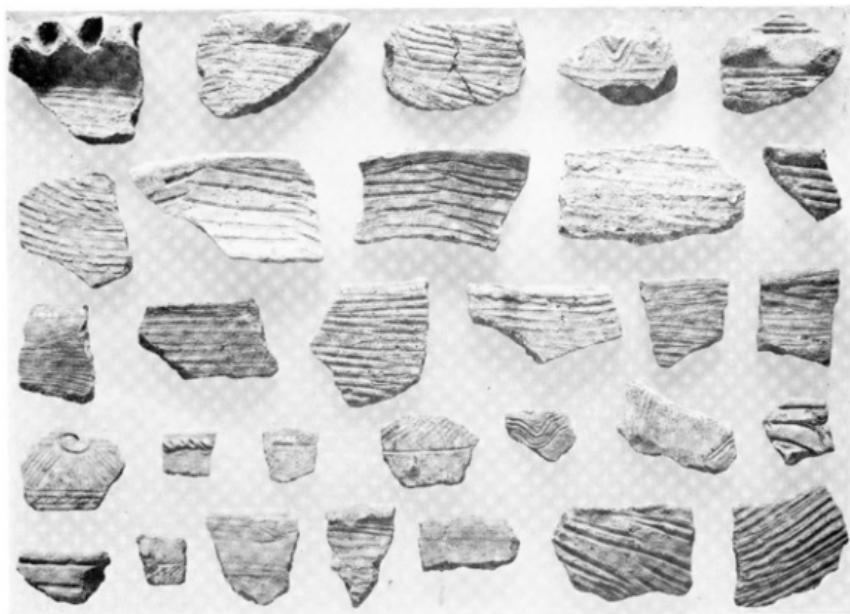


B 5 区、H 5 区出土土器

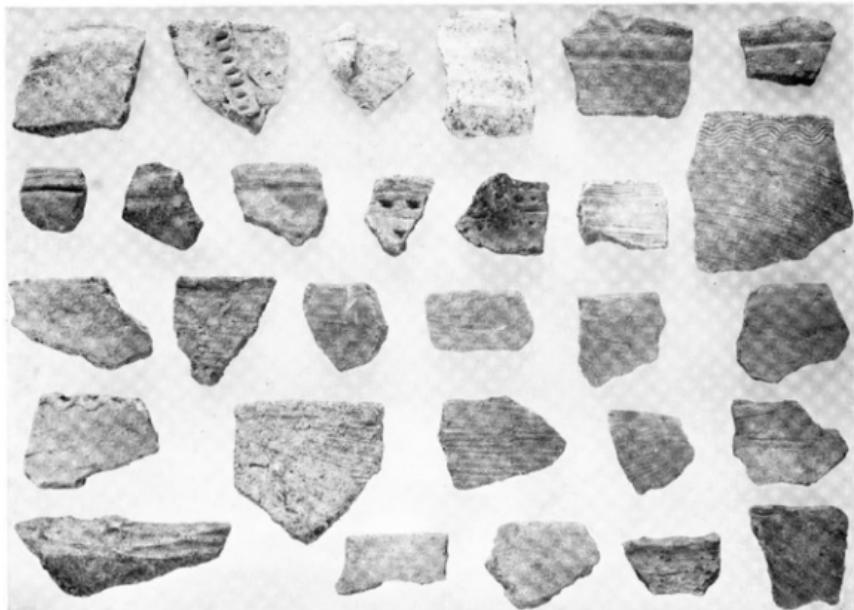


C 7 区 出 土 土 器

図版 V



A 7区、DO 2区出土土器



A 7区 出土 土 器

図版 VI

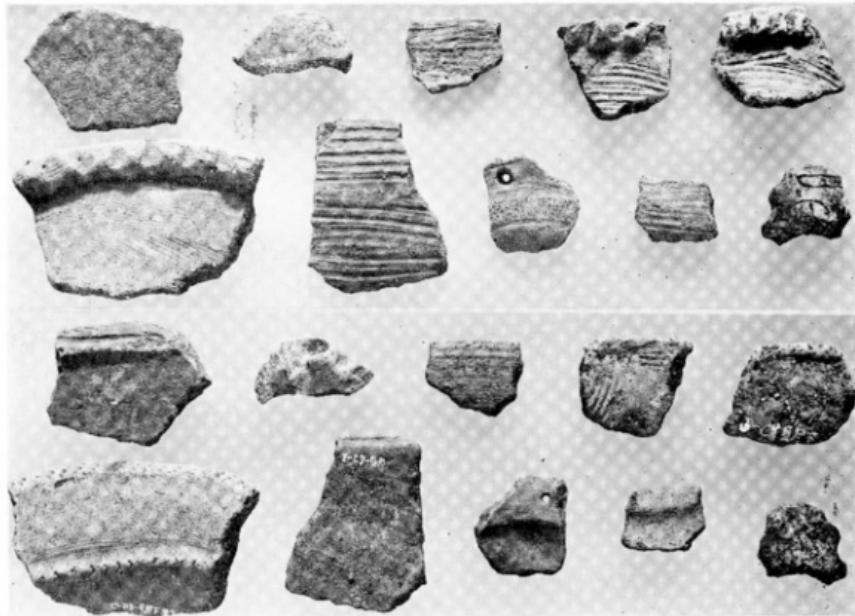


D7区、D8区 出土土器



各区出土土器

図版 VII



各区出土土器（上段表、下段裏）



各区出土土器

図 版 Ⅷ

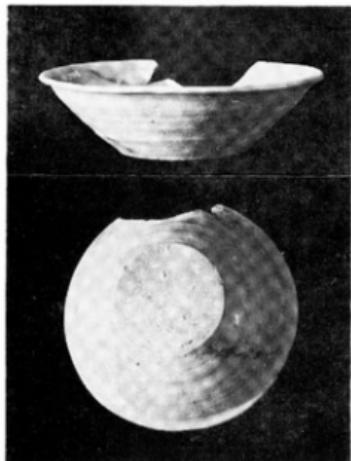


A7区 出土土器

図版 K

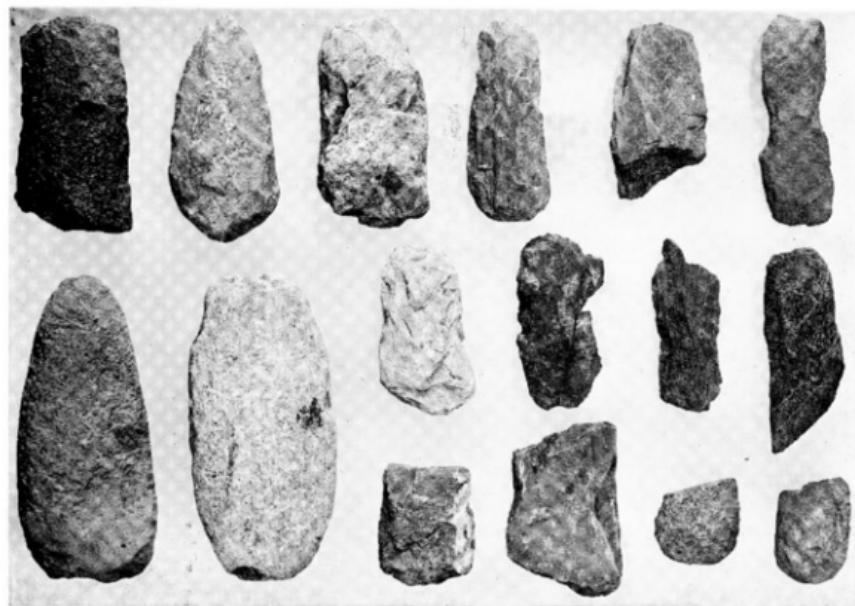


A 7区 出土土器

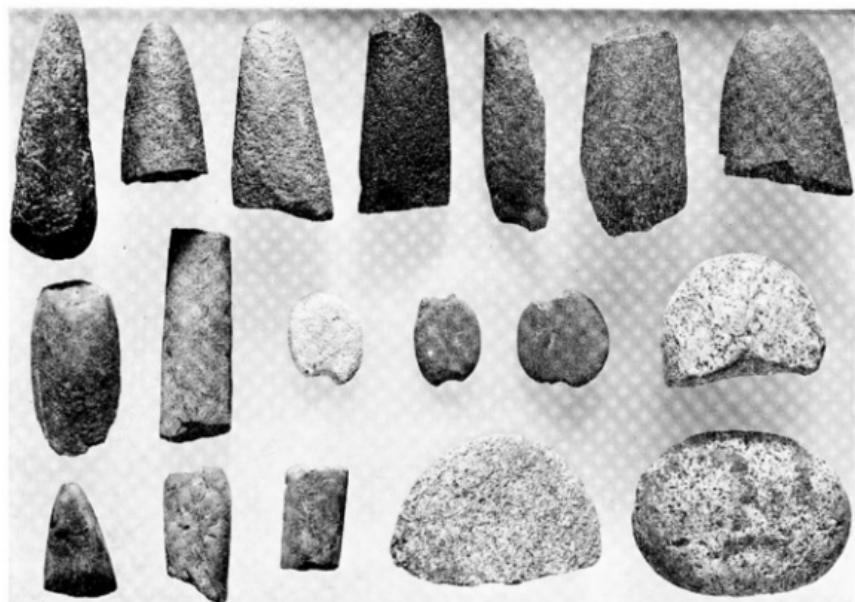


D 1区 出土土器

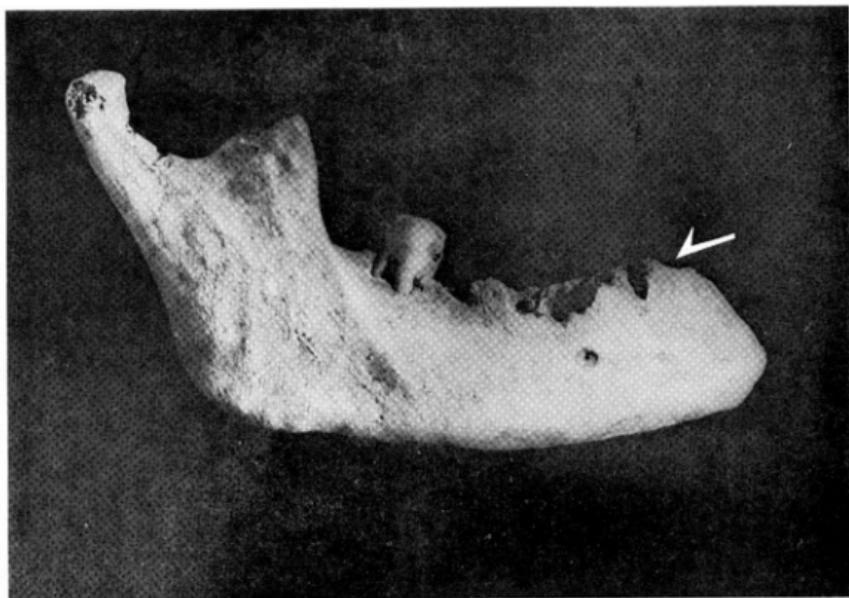
図版 X



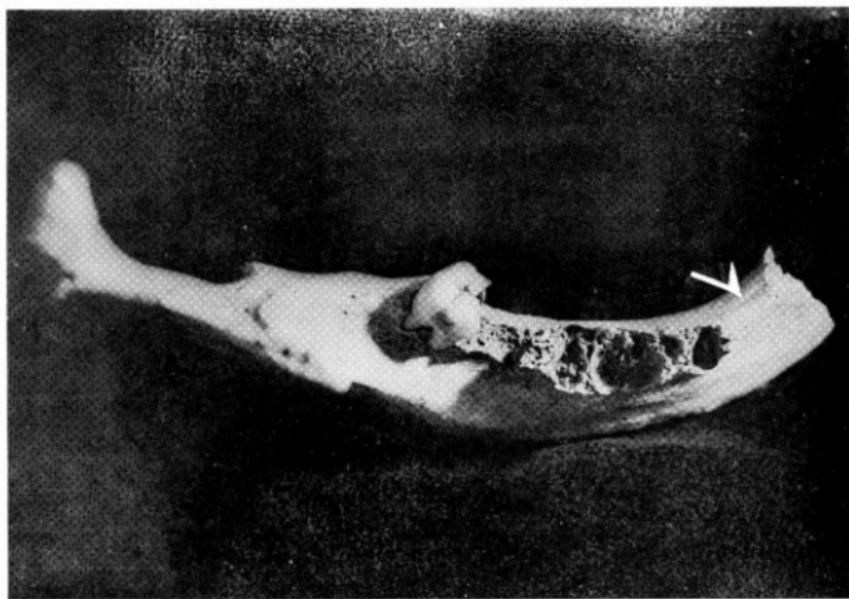
石器 1



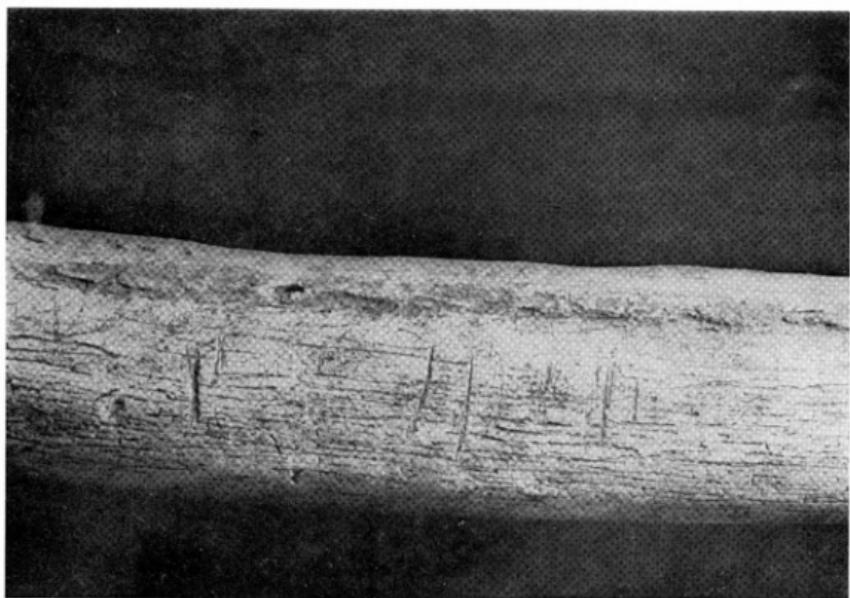
石器 2



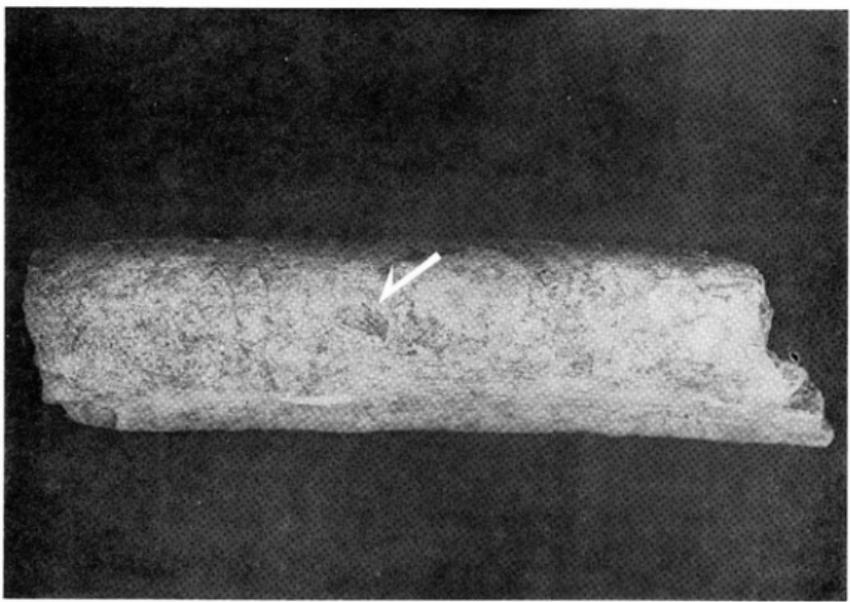
風習によると思われる抜歯のある下頸骨右側面観



同上 上面観 (矢印は抜歯の部位を示す)



人工の疑いのある傷痕を有する右大腿骨      注:矢って右が近位、上方は粗線を示す。



齧歯類の「かじりあと」と思われる傷痕のある右大腿骨  
注:矢印が「かじりあと」、向って左が近位、下方は粗線を示す。

昭和49年12月1日発行 ©

遠江見性寺貝塚の研究

編集 遠江考古学研究会

発行 烏田市教育委員会

印刷 株式会社 山田印刷所

